

三重大学
ベトナムフィールドスタディ 2014
報告書



2014年12月
ベトナムフィールドスタディ参加者一同

目次

I はじめに	p1
II 全体日程	p3
III 事前準備	p5
IV 曜日別ストーリー	p7
V 訪問先別報告・感想	p14
1. ホーチミン	
(1) 統一会堂	p15
(2) 戦争証跡博物館	p17
(3) ビンチュウ能力開発センター	p18
(4) FFSC (ストリートチルドレン友の会)	p21
(5) ホーチミン市師範大学(フィールドリサーチ&ホームステイ)	p23
(6) JICA 南部連絡所 サイゴン東西ハイウェイ 南北高速道路	p28
(7) バリアブントウ省投資促進センター	p30
(8) バリアブントウ養護訓練学校	p31
(9) ブンタウビーチでの夕食交流会	p33
(10) ホーチミン市都市鉄道建設事業	p34
(11) ホーチミン工業大学重化学工業人材育成プロジェクト	p36
(12) エスハイ KAIZEN 吉田スクール	p38
2. ハノイ	
(1) ベトナム日本人材協力センター (VJCC)	p40
(2) バックマイ病院	p42
(3) NCnetwork 大塚代表の講演会と日本人駐在員との夕食会	p44
(4) ベトナム国家農業大学 (前ハノイ農業大学)	p46
(5) アジア作物学会・第8回アジア作物学会議	p49
(6) ハロン湾	p51
(7) ドンラム村	p58

VI 感想	p60
1 谷口佳実 (人文学部人文学科 4 年)	p61
2 野村由衣 (人文学部人文学科 4 年)	p63
3 佐藤諒太 (工学部物理工学科 2 年)	p64
4 豊田瑞穂 (生物資源学部共生環境学科 2 年)	p65
5 中野成彦 (工学部分子素材工学科 2 年)	p67
6 西村奈々 (生物資源学部資源循環学科 2 年)	p69
7 奥村香遥 (人文学部文化学科 1 年)	p71
8 河嶋敬太 (人文学部法律経済学科 1 年)	p73
9 榊原莉子 (生物資源学部生物圏生命科学科 1 年)	p74
10 下山諒 (人文学部法律経済学科 1 年)	p75
11 長縄真吾 (引率 国際交流センター特任准教授)	p77
VII 巻末資料	p79
1 担当者一覧	p80
2 フィールドリサーチについて	p81
3 募集要項	p83

I はじめに

本フィールドスタディは、三重大学国際交流センター主催の国際キャリアアッププログラムの一環として行われました。この報告書ではベトナムフィールドスタディ（VFS）メンバーの様子、各訪問先で学んだこと、感じたことを報告します。

日程：2014年9月14日(日)～9月26日(金) (計13日間)

行先：ベトナム社会主義共和国

[ホーチミン市、バリア・ブントウ省、ハノイ市、クアンニン省]

目的：①途上国の開発現場・国際協力のプロジェクト視察、ベトナム人学生との交流等を通じて、グローバルな視野と問題発見・解決能力を身につける
②将来の国際ボランティア活動のきっかけを得る
③途上国で行動する力を養う

参加費用：参加者10名中7名が日本学生支援機構の海外留学支援制度（短期制度）、2名が三重大学国際交流特別奨学生制度により、7万円の奨学金を受給。

フィールドスタディメンバー

学生 谷口 佳実（人文学部人文学科4年）
野村 由衣（人文学部人文学科4年）
佐藤 諒太（工学部物理工学科2年）
豊田 瑞穂（生物資源学部共生環境学科2年）
中野 成彦（工学部分子素材工学科2年）
西村 奈々（生物資源学部資源循環学科2年）
奥村 香遥（人文学部文化学科1年）
河嶋 敬太（人文学部法律経済学科1年）
榊原 莉子（生物資源学部生物圏生命科学科1年）
下山 諒（人文学部法律経済学科1年）

引率 長縄 真吾（国際交流センター特任准教授）



ベトナム社会主義共和国 基礎データ

面積：32万9,241平方キロメートル

人口：約9,170万人（2013年時点、国連人口計画推計）

首都：ハノイ

民族：キン族（越人）約86%、他に53の少数民族

言語：ベトナム語

宗教：仏教、カトリック、カオダイ教他

GDP：約1,700億米ドル（2013年、IMF）

一人あたりGDP：1,896米ドル（2013年、IMF）

経済成長率：5.4%（2013年）

（出典 外務省HP）

II 全体日程

日付	AM	PM	宿泊先
9月14日 (日)	8:00 中部国際空港集合 10:30 出発	14:00 ホーチミン到着(タンソンニャット空港) 16:00 FFSC 到着 16:30 キックオフミーティング	ホーチミン (FFSC C)
9月15日 (月)	8:10 FFSC 説明 9:00 FFSC 出発 10:00 統一会堂 11:00 戦争証跡博物館	12:30 ビンチュウ能力開発センターにて昼食 14:00 子供たちと交流 16:00 FFSC 戻り、振り返りミーティング 17:30 名大土井総長補佐講義	同上
9月16日 (火)	8:00 ホーチミン師範大学 9:30 フィールドリサーチ打ち合わせ	12:00 歓迎昼食会(フエ料理) 14:00 フィールドリサーチ	同上
9月17日 (水)	7:30 FFSC 出発 8:00 ホーチミン市師範大学にてフィールドリサーチ準備	14:00 フィールドリサーチ発表	同上
9月18日 (木)	8:00 FFSC 出発 8:30 JICA 南部連絡所 サイゴン東西ハイウェイ 南北高速道路	13:15 バリアブントウ省投資促進センター 14:30 バリアブントウ養護訓練学校 18:00 夕食会	ブントウ(オーシャンサイドホテル)
9月19日 (金)	8:20 ホテル出発 10:00 ホーチミン都市鉄道建設事業プロジェクトオフィス	14:00 ホーチミン工業大学 16:00 エスハイカイゼンスクール 18:45 振り返りミーティング(JICA 南部連絡所にて)	ホーチミン (FFSC C)
9月20日 (土)	11:30 FFSC 発、ホームステイ先へ	ホームステイ	ホームステイ先

日付	AM	PM	宿泊先
9月21日 (日)	ホームステイ	13:30 FFSC 集合 14:30 FFSC 出発 16:30 ホーチミン出発(タンソンニャット空港) 18:30 ハノイ到着(ノイバイ国際空港) 20:40 振り返りミーティング	ハノイ (クオックホアホテル)
9月22日 (月)	8:20 ホテル発 9:00 JICAハノイ事務所 11:00 ベトナム日本人材協力センター(VJCC)	14:00 バックマイ病院 17:30 NC network 大塚代表講演会 19:00 日本人駐在員との夕食会 振り返りミーティング(バス内)	ハノイ (同上)
9月23日 (火)	8:10 ホテル出発 9:00 ハノイ農業大学 学生との交流会 研究室見学	13:30 アジア作物会議傍聴 振り返りミーティング (バス内) 16:00 タンロン遺跡見学 夜 自由行動	ハノイ (同上)
9月24日 (水)	6:00 ホテル出発 10:00 ハロン湾到着 10:10 ジャトロファ植林地見学 11:30 バイオトイレ見学	12:30 昼食 14:00 高速船で移動 ごみ収集所見学 水上村、小学校見学 マングローブ林見学 16:30 ハロン湾出発(バス内で振り返りミーティング) 20:30 ホテル到着	ハノイ (同上)
9月25日 (木)	7:40 ホテル出発 9:30 ドンラム村到着 10:00 お菓子作り、散策 11:00 テイ邸にて講義	12:00 ハイロイ邸にて昼食 14:30 ドンラム村出発 16:00 ドンスアン市場 17:00 自由行動 20:00 ノイバイ空港到着 22:00 振り返りミーティング 23:30 ハノイ出発	機中泊
9月26日 (金)	6:55 中部国際空港到着 7:00 解散		

Ⅲ 事前準備

メンバー決定から出国までの期間に 7 回の勉強会を開き、来るベトナムフィールドスタディ 2014 に向けて準備を進めていきました。勉強会での協議事項は以下の通りです。

●第 1 回勉強会 7/17：オリエンテーション

メンバーどうしの自己紹介、フィールドスタディのスケジュール・概要説明、今後の勉強会の日程調整を行いました。

●第 2 回勉強会 7/24：訪問先別の担当者分け

担当者には、各テーマについてのベトナムの現状・訪問先の概要について調べ事前勉強会で発表すること、訪問先と電子メールなどにより事前調整を行うこと、訪問当日の指揮をとることが課されます。担当者は、各人の興味関心等を考慮の上、以下のように決定しました。

概要/歴史（統一会堂・戦争記念博物館）	奥村・谷口
貧困問題（ストリートチルドレン（FFSC））	下山・河嶋
教育（ホーチミン市師範大学・ホームステイ）	谷口・奥村
ODA（JICA 南部連絡所・JICA ハノイ事務所）	河嶋・野村
インフラ（東西ハイウェイ・ホーチミン水事業・南部高速道路・都市鉄道）	佐藤・下山
経済/産業（ホーチミン工業大学・エスハイ・日本センター・駐在員懇親会）	豊田
医療/福祉（バックマイ病院・バリアブントウ養護訓練学校）	谷口・野村
農業（ハノイ農業大学・アジア作物学会・ドンラム村）	西村・榊原
環境（ハロン湾）	中野

さらに訪問先別の担当者の他に、ロジ担当者も決定しました。ロジ担当者の役割としては、ホテルの予約、レンタカー管理、スケジュール・メンバー表作成などがあり、河嶋・榊原・中野・西村・野村が担当することになりました。ロジ担当者の詳細については、巻末に記載してあります。

●第 3 回勉強会 7/28：ベトナム語講座

三重大学にベトナムから留学されている、Dang Vu Thanh Huong さん、Nguyen Giang Thi Cam さんにベトナム語を教えてくださいました。この日は発音と簡単なあいさつが中心となりました。

●第 4 回勉強会 8/18：ベトナム語講座・事前勉強発表会・昨年度の体験談

・ベトナム語講座：前回の復習に加えて自己紹介、数字などを教わりました。

・事前勉強発表会：第 2 回で決めた担当者による、各テーマの発表会が行われました。発表の内容としては、各テーマについてベトナムの現状・課題と、日本との比較、また各訪問先の概要、訪問先で学ぶべきポイント、さらに訪問に際しての留意点などとなりました。発表時間をおよそ 10 分、質疑応答を 5 分とし、パワーポイントを用いてプレゼンテーションを行いました。第 4 回では概要/歴史、教育、インフラ、経済/産業、農業の担当者が発表しました。

・昨年度の体験談：ベトナムフィールドスタディ 2013 に参加された水谷美穂さん、中野成彦さん（今年度も参加）による簡単な報告会をして頂きました。訪問先での注意点や生活面での留意点など幅広く話して下さいました。

●第 5 回勉強会 8/25：ベトナム語講座・事前勉強発表会

・ベトナム語講座：前回の復習に加えて文法や会話表現など、ホームステイ等でも大変役立ちそうな、実践的な内容を学びました。

・事前勉強発表会：第 5 回では ODA、貧困問題・医療/福祉・農業・環境の担当者が、前回と同じ要領で発表しました。

●第 6 回勉強会 9/1：サマリーシート内容確認・ロジ面確認・各訪問先での内容決め

・サマリーシート内容確認：各担当者が、作成したサマリーシート（訪問日時とアクセス、訪問先の対応者の方のお名前と訪問先の概要・訪問目的、訪問先での質問事項、留意点等を記したもの）を読み上げ、その訪問先に関する情報をメンバー全員と共有しました。その中で疑問点や問題点を出し合い、次回の勉強会までの課題としました。

・ロジ面確認：安全面や持ち物などについての情報を全員で共有しました。

・各訪問先での内容決め：ホーチミン市師範大学での出し物、ビンチュウセンターでのストリートチルドレンとの交流内容について、全員で話し合いました。

●第 7 回勉強会 9/5：サマリーシート最終確認・出発準備

・サマリーシート最終確認：前回出た疑問点や問題点等を訪問先の方に連絡をするなどして解決し、今一度情報を共有し最終確認をしました。

・出発準備：危機管理（医療面、感染症、緊急時の連絡方法）やレンタカーの予約状況といったロジ面進捗の確認、英文日程確認、さらには帰国後の報告書などについて話し合いました。

●その他

・以上で挙げた勉強会とは別に、9/2-3 に国際キャリアアップコースの一環として開講された、夏季集中講義・国際地域開発論（西村美彦教授）を希望者（5 名）で部分聴講しました。

・帰国後の学習として、VFS 参加者は後期共通教育科目「国際協力入門」を受講していません。

IV 曜日別ストーリー

1日ごとの予定とメンバーの様子を記載します。

9月14日（日）

中部国際空港発
↓
タンソンニャット空港着
↓
FFSC チェックイン
↓
振り返りミーティング
↓
各自自由

ついに VFS がはじまった。各々時間に遅れることなく、中部国際空港に集合することができた。初日ということもあって、みんなワクワクした様子だった。ベトナムに着いて感じたのはとにかく蒸し暑いということ。空港で長縄先生と合流し、バスで移動した。バイクの多さや、ベトナムの街並みはとても新鮮であった。FFSC につくと、スタッフの方が温かく迎えてくださった。ミーティングで今後の予定と安全について確認した後、スーパーへ行った。値段の見方やレジでの会計など戸惑うことが多かった。その後バインセオを食べに行ったのだが、事前に気をつけるよう言われていた氷と生野菜をすでに口にしていた。夜には女子トークをして、お互い打ち解けることができたと思う。

9月15日（月）

FFSC 説明
↓
統一会堂
↓
戦争証跡博物館
↓
ビンチュウ能力開発センター
昼食・視察
↓
振り返りミーティング
↓
名大土井先生による講義

VFS 2 日目。みんなでベトナムの朝食を味わった。池田さんから FFSC についての説明をしていただいた後、まだ見慣れない景色に心を躍らせながらホーチミン市内を見学。ビンチュウ能力開発センターでは、たくさん子どもたちと交流した。子どもたちの笑顔には癒されたのだが、帰る頃にはみな疲れ果てていた。その後 FFSC で土井先生による講義を受けた。夕食はフーンさんとフーンさんの弟、アンさんと共にフォーを食べに行った。このお店のフォーが一番おいしかったのではないだろうか。その後ベトナム市場へも連れて行っていただいた。同じ商品でも値段が違うことに驚いた。外国人向けの高額な値段で買い物をしていた人がいたのである。夜はみんなでベトナムのフルーツを堪能した。

9月16日（火）

ホーチミン市師範大学
歓迎会
↓
フィールドリサーチ（午前）
↓
食事会
↓
フィールドリサーチ（午後）

VFS 3日目。朝早くから FFSC を出発し、ホーチミン市師範大学に到着。師範大学のみなさんは温かく迎えてくれた。両大学について説明をした後、中野さんがさくらを熱唱。前年も同じことがあったそうだ。私たちは、ドラえもんの歌を歌いながら、お面をつけてどら焼きを配り歩いた。その後グループごとに別れてフィールドリサーチにとりかかった。昼食は師範大学の方の主催によるもので、フエ料理を堪能した。ここで私たちはシントーという衝撃の飲み物に出会った。午後も各々グループに分かれてリサーチを行った。師範大学の学生と鍋を食べに行った人もいた。夜には翌日の発表準備に追われ、部屋の電気はなかなか消えることはなかった。準備の最中、西村さんは誕生日を迎える。

9月17日（水）

フィールドリサーチ発表準備
↓
フィールドリサーチ発表・表彰
↓
チェーのお店へ

VFS 4日目。夜遅くまで準備をしていたからであろうか、寝坊した人もいたが、全員が朝食をすべて食べることに成功。ホーチミン市師範大学では、午後に行われる発表の準備をした。どのグループも発表に向けて真剣な様子であった。途中発表に使うスライドのデータが消えるなど、ハプニングに見舞われたグループもあったが、すべてのグループが無事に発表を終えた。どのグループも工夫を凝らした、素晴らしい発表であった。その後素敵なギター演奏やダンスを披露していただいた。グループの表彰の後は、みんなでチェーのお店に行った。ドリアンチェーが苦手な人が続出。鍋料理のお店や公園に連れて行ってもらった人もいた。師範大学のみなさんの親切なおもてなしには感謝しきれない。

9月18日(木)

JICA 南部連絡所
↓
サイゴン東西ハイウェイ
↓
投資促進センター
↓
養護訓練学校
↓
オーシャンサイドホテル
チェックイン
↓
ブンタウにて夕食会

VFS 5 日目。JICA 南部連絡所で、豊田さんから JICA の概要についての説明をしていただいた。実際にサイゴン東西ハイウェイや高速道路を通ってみたのだが、この時すでに多くの人が疲れを感じていた。河嶋さんが体調を崩したのはこと頃であった。少しの間ではあったがジャパンデスクを訪問し、養護学校へと向かった。途中、養護学校の場所が分からず、訪問先とは関係のない施設へ行ってしまったこともあり、予定していた到着時間より少し遅れたが、なんとか養護学校にたどり着くことができた。ここでも子どもたちの笑顔には癒された。夜には海が一望できるレストランで食事会をした。食事会では、各々が話を聞く中で何かを感じることもあったであろう。

9月19日(金)

オーシャンサイドホテル
チェックアウト
↓
ホーチミン都市鉄道建設事業
(日本工営)
↓
ホーチミン工業大学
↓
エスハイカイゼンスクール
↓
JICA 南部連絡所
(振り返りミーティング)

VFS 6 日目。訪問先が多く忙しい 1 日であったが、どの訪問先も充実したものであった。日本工営増沢さんによる説明の中では、日本は素晴らしい技術を持っているものの、それを海外に売り込むプレゼン力に課題があることを知った。ホーチミン工業大学では、すべて英語による会話であったため、始めは緊張していたが、徐々に打ち解けることができた。訪問先担当である豊田さんの堂々としたスピーチは素晴らしいものであった。エスハイカイゼンスクールでは、実際に授業の様子を見せていただいた。大きな声での挨拶や、夢を語る姿、はきはきと返答をする様子には圧倒された。ベトナム人の授業に対する姿勢や目標に向かって進んでいく姿は、私たち日本人が見習わなければいけないような気がした。

9月20日(土)

各自自由



ホームステイ

VFS7日目。午前は自由時間であったため、いつもより遅い起床となった。朝食も各自で済ますことにしていたため、バンタン市場へ向かった。初めて自分たちだけでタクシーに乗るということでみんなワクワクしていた。屋台でご飯を食べるなど、ベトナム人の朝を体験しお土産も買うことができた。市場に行くのは2回目であったが、まだ慣れない。同じ商品でも買った店によって値段が違うということが多々あった。高く買ってしまったメンバーはとても悔しがっていた。その後、FFSCに戻りホームステイ先の学生たちの迎えを待った。ホームステイでは買い物に連れて行ってもらったり、散歩をしたり、ご飯を一緒に作ったりなど、とても楽しい時間を過ごした。

9月21日(日)

ホームステイ



FFSC チェックアウト



ノイバイ空港

(ハノイへ)



クオックホアホテル

チェックイン

VFS8日目。朝4時から教会に行き聖歌を歌ったというメンバーもいた。ホームステイの醍醐味である、現地の人の生活を存分に体験できただろう。そして、5日間お世話になったFFSCの方々に別れを告げ、わたしたちは首都ハノイへ向かった。ホーチミンからハノイへは2時間ほどで到着した。たくさんの荷物を座席にも積み、マイクロバスでホテルへ向かった。道中は疲れのためか静かであった。しかし、チェックインしたときのテンションはとても高かった。なぜなら、ホテルがとても綺麗なのだ。部屋は広く、一人ひとつベッドがある。ウェルカムフルーツもある。久しぶりに湯船につかることもでき、たまった疲れを癒すことができただろう。

9月22日（月）

JICA ハノイ事務所



JICA 日本センター



バックマイ病院



NC network 講演会



日本人駐在員夕食会

VFS9 日目。この日は大学院生でベトナムにインターンシップに来ていた山下さんと合流した。一日だけだが、新しいメンバーが増え、バス内がまたにぎやかになった。バックマイ病院で病院内を見学させていただいていたとき、日本語ペラペラなおじさんが VFS メンバーの一人に話しかけてきた。一言二言話して終わりかと思いきや、見学が終わるまでずっと話しかけてきた。最初は「なんだ、この人は。」と怪しんだが、日本が大好きで独学で日本語を勉強し、今日は奥さんのお見舞いで病院に来ているのだそうだ。とてもステキではないか。夕食会はおいしい草料理と興味深い体験談を話していただき、おなかも胸も満たされた。

9月23日（火）

ハノイ農業大学



アジア稲作学会



タンロン遺跡

VFS10 日目。VFS では3回目の学生との交流であった。農業大学には女子が多く、グループ交流では必然的にハーレムが形成された。これは、デジャヴである。（師範大学で男子メンバーは女子に囲まれて写真を撮るなどハーレムをつくっていた。）やはり、VFS でモテ期を失うということは事実であろう！学会を傍聴したあとは、急きょタンロン遺跡に行くこととなった。VFS で初めて観光した瞬間である。夕食は犬料理を食べた。とてもおいしかった。ちなみに全員ではない、2人のみだ。お店までは、シクロと呼ばれる人力車の自転車バージョンを運転するおじさんに連れて行ってもらった。道中「It's No.1! タクシーNo.2!」と何回も言っていた。確かに最高に面白かった。

9月24日（水）

ホテル発
↓
ハロン湾着
ジャトロファ植林地見学
↓
バイオトイレ見学
↓
昼食
↓
ゴミ収集所、マングローブ林見学
↓
ホテル戻り

VFS11日目。早朝の出発ということであえてオールするというメンバーもいた。4時半ごろにホテル周辺を散策していると、近くの公園でランニングや筋トレをしているおじいさんたちや爆音でエアロビのようなことをしている団体がいた。キレッキレのカンフーをしているお兄さんもいた。ベトナム人が途上国であるが長寿国である理由が分かった気がした。早朝の出発であったため、ホテルで用意してもらった朝食を食べ終わるとバス内はすぐ静かになった。ハロン湾までは4時間という長い道のりなので、十分な休息の時間となっただろう。行きのサービスエリアにはたくさんの石像があった。あれはなんなのか、いまだに謎である。

9月25日（木）

ドンラム村
↓
ドンスアン市場
↓
ホテルチェックアウト
↓
空港
(振り返りミーティング)

9月26日（金）

日本到着

VFS最終日。市内から遠ざかるにつれ、これぞ東南アジアという風景が広がっていった。ドンラム村で癒されたわたしたちはベトナム最後の市場へ向かった。今回は各々上手に買い物ができたようだ。その後、ベトナムといえばスパ！スパといえばベトナム！ということで、スパへ向かった。安い、気持ちいい、疲れがとれる、の三拍子で最高だった。空港では長縄先生がごちそうしてくださり、食事をしながらVFSについて振り返った。換金した分をすべて使い切ったメンバーが2人もいた。約2週間はあっという間に過ぎ、とても濃い日々だった。最後の最後にボッタくられるという事件もあり、オチを外さない最高のVFSメンバーだった。

V 訪問先別報告

各訪問先の概要と訪問を通じて感じたことを記載します

1. ホーチミン

(1)統一会堂

9月15日(月) 10:00-11:00

1. 概要

統一会堂は、ホーチミン市内にある建物です。時代により、ノロドン宮殿、独立宮殿など呼び方は変化して、現在に至ります。1975年、北ベトナム軍の戦車がフェンスを破り突入し、南ベトナムの首都サイゴンは陥落しました。現在でも、その当時のソ連製の戦車が敷地内で展示されており、見る事が可能です。建物内の一部の部屋は現在でも国際会議などで使用されます。建物は1階から4階までの地上階と地下階から成ります。フロントで日本語のガイドをお願いすることもできます。開館時間は7:30-11:00/13:00-16:00、入場料は3万ドンです。

2. 感想

FFSCからバンで移動して10~15分ほどで着きました。大きくてきれいな統一会堂には圧倒されました。左にあるチケット売り場で入場料を払って中へ入りました。フロントに日本語のガイドをお願いしたところ、今日はできないとのことだったので、各自見学することにしました。見学しようとしていたところ、たまたま近くに日本人の団体と日本語を話すガイドさんを発見したため、私はその団体と一緒に途中まで案内させてもらいました。

はじめに地上階を見学しました。私はなんととってもきらびやかな部屋に驚きました。椅子や机、絨毯など…どれも高級そうなものばかりでした。そして、そのような部屋がいくつもあったことにも驚きました。また地上階では、映画室やマージャン台などが置かれた娯楽室、ヘリポート、さらには地下へと脱出するための扉（タンソンニャット空港まで続いているという噂）などを見学することができました。ベトナム戦争中でも、娯楽室は使われていたのでしょうか、と疑問に思う点もありました。屋上からの眺めはホーチミン市の街の様子を一望できてとてもきれいでした。

次に地下へ見学に行きました。地下階は地上階とはまったく違う、緊迫した雰囲気でした。薄暗い廊下、いくつものベトナムの地図が張られた司令室…ベトナムの裏側を見た気がしました。

また、広場には戦車を見ることができます。これは、サイゴン陥落の際、フェンスを越え入場した戦車です。建物の外観や広場を見ただけでは、きれいな場所だな~としか感じなかったのですが、戦車と統一会堂を見て、ベトナムに来る前に見たサイゴン陥落の映像を思い出しました。約40年前は戦争が行われていて、ここはそのベトナム戦争が終結した場所なのだ、と実感させられました。今のベトナムから、最近まで戦争をしていたという

事実にはただ驚くしかありません。

ベトナムフィールドスタディでベトナムに来た私たちは、どのようにして現在のベトナムができあがったのかについて、知らなければならないことだと思います。統一会堂を見学できたことはベトナムについて知るための、1つの手がかりになるものであったと感じています。

また統一会堂を見学する際には、事前の学習がとても大切だと思いました。バンの中で、ベトナムについてのクイズをしたときに、私も含め、ベトナム戦争についての知識が曖昧だったこともあったからです。事前の学習がしっかりとしていればしているほど、統一会堂の理解も深まるのではないかな、と思いました。(文責：奥村)



(2)戦争証跡博物館

9月15日(月) 11:15—12:15

1. 概要

ベトナム戦争について知ることができる博物館です。3階建ての建物が中心ですが、敷地内にはベトナム戦争で使用された戦闘機や戦車が展示されているほか、コンダオ島刑務所の牢獄を再現した建物があります。建物内には、ベトナム戦争に関係する多くの遺物と、写真が展示されています。写真の説明は一部日本語で説明が書かれているコーナーはありますが、大半の説明はベトナム語と英語で書かれています。ベトナム戦争中に命を落としたカメラマンや報道写真家を紹介するフロアもあり、日本人カメラマンも多く紹介されています。その中にはピューリッツァー賞を受賞した沢田教一さんの「安全への逃避」も飾られています。開館時間は7:30~12:00/13:30~17:00、入場料は3万ドンです。

2. 感想

統一会堂からバンで移動してすぐに到着しました。戦争証跡博物館に入って最初に目に入ったのは日本語で書かれたポスターでした。後で調べると日本共産党により提供されたものでした。博物館は1階から3階まで、非常にたくさんの写真と遺物が展示されていました。日本語での説明はほとんどなかったのですが（私は日本語で紹介されているコーナーがあることに驚きました。）、写真だけでも十分理解でき、ベトナム戦争の悲惨な様子を肌で感じました。ベトナム戦争中から終結後と、その後枯葉剤による影響を受けた人々の写真が中心となっていました。大砲や爆弾、戦闘機のかげら、戦争中に着用していた服などの遺物も多く展示してありました。博物館の外には、戦車や戦闘機が多く展示されていました。コンダオ島刑務所の牢獄を再現した建物にはギロチン台もあって、あまりの生々しさに衝撃を受けました。

私は印象的だったのは、戦場カメラマンや報道写真家の方たちが多く戦争についての記録を残していたということです。写真の中には、銃弾が飛び交う中で撮影したであろう写真が多くありました。仕事といえども命をかけて撮った写真であることを思うと、一つ一つの写真に重みを感じました。また、こうして戦争についての写真を見て当時の様子を知ることができることをありがたく感じました。

戦争証跡博物館は、ホーチミン市に来たのなら絶対に見学するべきところだと思います。今までベトナム戦争について調べて学んできたつもりでしたが、博物館の展示物は戦争の様子がそのまま残されていて、それを見たときの衝撃は想像以上のものでした。また、枯葉剤の影響を受けた人々の写真を見て、まだベトナム戦争は終わっていないのだなと感じました。戦争は二度と引き起こしてはならないと強く感じました。（文責：奥村）

(3)ビンチュウ能力開発センター

9月15日(月) 12:15-15:00

応対者：Ms.Loan ビンチュウ能力開発センター職員の皆様

1. 概要

ビンチュウ能力開発センターは、FFSC(ストリートチルドレン友の会)が運営する7ヶ所の能力開発センターの一つです。FFSCが運営する能力開発センターでは、家庭が貧しかったり、家庭環境が不安定で公立の学校に通うことが困難であったりする子供たちが小学5年生までの課程を勉強しています。FFSCの最終目的は子供たちの自立を支援することであり、教育に重要性を見出しています。ベトナムでは高卒だとあまり良い職につけないということで、FFSCの無料授業の他に政府の夜間学校に通い、試験を受けて課程修了の認定を得、FFSCを出てからは奨学金支援を受けて進学をする人や、職業訓練を受けて就職に備える人もいます。ちなみに、最新情報によると、FFSC出身者のうち、大学に3人、短大に9人、専門学校に27人が進学したそうです。また、FFSCでは貧困問題の解決のためには子供たちの保護者への啓蒙活動も行い、貧困問題全体を根本的に解決しようとしています。そこで、保護者向けのセミナーを開催し、環境問題や教育の重要性について学ぶ機会があります。また、保護者のみならず、小学校高学年の子も対象に、性教育を実施しています。さらに、ヘルスケアやメンタルケアも行っています。

さて、今回私たちが訪問したビンチュウ能力開発センターは、午前と午後の2部構成でクラスが開講されており、幼児から小学5年生までの約400人の子供たちが学んでいます。寄宿舎も併設されていますが、そもそもストリートチルドレンとはいっても、ユニセフの定義に基づくと、ここに通う子供たちは家庭の経済状況が悪く、帰る場所はあるものの、道で労働をしているような子供たちだそうです。今回は、子供たちと約1時間の交流を通じて、多くの気づきを得てきました。

2. 感想

まず、センターの門をくぐると、子供たちが「Hello!」と元気に挨拶をしてくれました。早起きでハードなスケジュールをこなしていて疲れていた私たちに力をくれました。

今回は、小学4～5年生の約40名の子供たちと交流したのですが、その前に、私たちは昼食をいただき、午前中のプログラムで空腹になったお腹を満たしました。豚肉を焼いたものにご飯と野菜がのったプレート、ビーフン、スープ、そしてリュウガン(ライチのような果物)が出てきました。とてもボリュームがあり、どれも味付けが日本人の口に合っていてとても美味しかったです。その後、交流時間までは校庭で集会のようなものが開かれていたので、その様子を見学しました。教科書のようなものが配られていたりしたのですが、皆しっかり先生の話に耳を傾けていて感心しました。

その集会が終わると交流会の始まりです。まず、子供たちが私たちの前に並んで挨拶をしてくれました。その際、なんと彼らが日本の有名な童謡「大きな栗の木の下で」と「チューリップ」を披露してくれたのです。日本の曲を元気いっぱい、振り付け付きで歌ってくれて嬉しく思いました。FFSCの方の話を知ると、施設では日本語の授業が行われているとのことでした。今後、ぜひ彼らに日本に関心を持ってもらえたら、と思います。

今回の交流会では、ボール遊び・縄跳び・折り紙の3つのグループに分かれて遊びました。私は縄跳びグループの担当だったのですが、やはり初めのうちは言葉の壁が大きかったです。当初、私ともう一人の担当の学生で合図をかけて縄を回して皆に飛んでもらうつもりでやっていたのですが、縄を回すのが下手だったせいか、なかなか回数を重ねることができず、しまいには子供たちが縄を回したが、気がついたら別のゲームに変わっていました。ベトナム語であれこれ指示されて、言われるがまま縄を回したりしてあげていましたが、皆、弾けるような笑顔を見せながら楽しんでくれたようです。時間が経過すると今度はボール遊びをしたり、折り紙を折って欲しいと頼まれたりといろいろな遊びを楽しみました。実は、私は不器用なので粗末な鶴を折ってしまったりして申し訳なかったのですが、喜んでくれたかどうかは気になります。

交流会も終わりに近づくと、たくさんの子供たちが私たちに肩車をして欲しいと群がってきました。普段、活発に遊ばなくなった私たちはすでに疲労困憊という感じでしたが、この時にはすでに言葉の壁などあたかも存在していないかのように、身振り手振りや英語を使ってコミュニケーションをとることができており、子供たちと距離を縮めることができた気がしました。しかし、楽しい交流会が終わり、私たちが帰ろうとすると、子供たちはもっと遊んで欲しいと集まってきて、私たちも寂しさを感じました。ところが、彼らはメリハリがしっかりついていて、次の授業のベルが鳴った途端、一斉に教室へと走っていったのでした。最後、ある男の子が折り紙の手裏剣を渡してくれたのですが、ここの子供たちは皆素直で優しい子たちだなと感じました。嬉しかったです。

さて、楽しい交流の時間を共有してくれた子供たちですが、大事なことを忘れてはいけません。この施設で学ぶ子供たちは皆、家庭の経済状況や家庭環境があまり良くなく、通常の公立学校に通うことが困難という問題を抱えています。しかし、私たちが見た子供たちの姿は、彼らがそういった事情を抱えた子供たちであることを忘れさせられるほどに明るく前向きなものでした。彼らの姿を見て感じたことは人それぞれ多様だと思います。私は、自分が情けない人間なのだと感じました。学びたくても、学校へ行き満足に学べない子供たちを実際に目にしたわけなのですが、そんな子供たちが存在する反面、私たちは本当に恵まれていて、義務教育の過程を修了し、現在はこのように大学にまで通わせてもらっています。FFSCの施設で学ぶ子供たちは、厳しい自分の生活や家庭の現状に下を向いているわけではなく、明るく懸命に生きているのだということを実感しました。彼らの将来の選択肢は、現状では狭いはずですが、それなのに、このように懸命に努力しているのです。しかし、恵まれた環境にいて、努力で多様な道を拓けるはずの私は、特に明確な夢や目的

を持っているわけでもなく、怠けた生活を送ってしまっています。ですから、今回の訪問を機に、一度自分の生き方を見直す必要があると考えています。この恵まれた環境にいることを感謝し、学べない人たちの分まで懸命に勉強すべきだと強く思いました。

これから私たちには解決しなければならない課題が山積になっています。まず、彼らのような子供たちが少しでも良い環境に身をおけるようにしてあげなければなりません。しかし、この現状を打開することは容易ではありません。学びたくても学びたい子供たちがいる現実を目の当たりにしたことがない人、あるいはそうした現実を知らない人、目を背けようとしている人が多く存在します。FFSC 事務所での説明会でも伺ったように、まずは私たちが人々に情報を発信し、多くの人に振り向いてもらうことが重要で、それを第一歩として私たちができる支援を探っていきたいと思います。子供たちから多くの学びを得た訪問となりました。(文責：下山)



(4)FFSC (ストリートチルドレン友の会)

9月14日(月)～20日(日)

応対者：FFSC 事務所 Lam Ngoc Mai 副所長

FFSC 事務所 Kim Loan さん

FFSC 事務所日本人ボランティア 池田りこさん

(特別講義(9月14日月) 名古屋大学経済学研究科 土井康裕総長補佐・准教授)

1. 概要

ストリートチルドレン友の会 (FFSC: Friends For Street Children)はベトナム・ホーチミン市カトリック団結委員会 Catholic Committee of HCM City の傘下で活動する民間・非営利のベトナムの NGO です。1980年代のホーチミン市街には、ベトナム戦争の後遺症により、ストリートチルドレンが多く存在しました。その悲惨な状況を見た、当時ベトナム人新聞記者であったチャン・ヴァン・ソイ氏が自宅を改築し、私財を投じて設立されたのが FFSC です。FFSC は金銭的、そして家庭内に問題を抱え教育の受けられない子どもたちに平均的な教育を受けさせ、自立させることを目標としています。現在では、現在7カ所の「能力開発センター」を運営し、約1,300名の子どもたちのケアをしています。

今回僕たちはホーチミン滞在中に、この FFSC のゲストハウスに宿泊させていただきました。

2. 感想

ホーチミン滞在中、僕たち VFS 参加者一同は去年の参加者に引き続き FFSC のゲストハウスに宿泊させていただきました。ホーチミンでの活動は朝が早いことが多かったですが、近くにある教会の鐘の音に起こされる毎日でした。そんな慌ただしい朝でも、FFSC の方が用意してくださる朝食はとても美味しく、1日の元気の源となりました。用意してくださる朝食は、中身のぎっしりつまった肉まんなど朝からベトナムの料理を堪能することができました。また、FFSC では日本人ボランティアの池田りこさんからベトナムの貧困問題の現状、そして FFSC の活動指針についてのお話を伺うことができました。池田さんのお話ではベトナムの貧困問題の深刻さを再確認することができたと共に、その後のビンチュウセンターの訪問のためのおおきな予備知識を得ることができました。さらに、2日目には東海三県の大学の国際協力に関する連携プログラムの一環で、名古屋大学の土井先生が FFSC にて、僕たちに特別講義を行ってくださいました。講義は VFS 参加者1人1人がベトナムに来てからのベトナムの印象を話し、その1つ1つに先生がお話をするという形で進められました。先生の講義を通じて気付いたことは、ベトナムに来てから全く同じものを見て、同じものを食べ、同じところで生活してきた VFS 参加者の1人1人がベトナムに対して違う印象を抱いていたということです。長い研修の中でも、違う感性を持った仲間の考え方

を大切にしていきたいと感じました。

ホーチミンでは FFSC の方々の暖かい対応によってとても快適に過ごすことができました。特にお世話になった Loan さんをはじめ、FFSC のみなさん本当にありがとうございました!! (文責：河嶋)



FFSC 出発時 Loan さんと

(5)ホーチミン市師範大学

9月15日(火)～16日(水) フィールドリサーチ

9月20日(土)～21日(日) ホームステイ

応対者：ホーチミン市師範大学越日文化・教育センター Le Thi Hong Nga センター長
日本語学科の学生、教員の皆さん

1. 概要

ホーチミン市師範大学は、教育学部 25 学科を有する教員育成大学です。1956年にサイゴン大学として設立され、1976年には南北統一により現在のホーチミン市師範大学という名前に変更されました。2008年には日本国総領事館及び JICA の支援により、日本語学科が設立しました。ホーチミン市師範大学と三重大学は、2009年に学術・学生交流協定を締結し、今年には協定の更新が行われました。三重大学からはフィールドスタディの他、国際インターンシッププログラムで毎年、師範大学を訪問しています。ホーチミン市師範大学からは、これまでに14名が三重大学に留学しました。

2. 感想

2-1 フィールドリサーチ 1 日目

8:00-9:00 歓迎会【三重大学の紹介・出し物あり】

9:30-11:45 フィールドリサーチ事前打ち合わせ

12:00-14:00 歓迎会のパーティー

13:30-終日 各グループが街頭調査

フィールドリサーチ 1 日目は、歓迎会→フィールドリサーチ準備→昼食会→フィールドリサーチという流れでした。

はじめは、楽しみだという気持ちと共に初めて会う外国の学生とすぐに仲良くなれるのかな？という不安がありました。しかし、ホーチミン市師範大学の学生さんたちがとてもフレンドリーに話しかけてくれて、不安はすぐなくなりました。

私は、ベトナムの衣服についてフィールドリサーチを行いました。日本の雑誌を読みながら師範大の学生と話し合うと、ベトナムと日本のファッションの相違点や共通点が見つかって、とても盛り上がりました。フィールドワークでも、デパート、服を多く取り扱う市場、公園など、観光ではいけないであろう場所に行き、ホーチミンの街に“触れた”気がして、とてもわくわくしました。がらがらのように見えて、フードコートは大人気のデパートや、雨が降って大慌てしている市場、午後4時からのラッシュアワーや、公園ではみんなバドミントンの羽を蹴って遊んでいる（後で調べると蹴羽根〈ジェンズ〉というスポーツらしいです）様子など、ホーチミンの日常を少し体感できた気がしました。もちろん

ん、衣服に関しても、日本や韓国の流行がそのままベトナムの流行になっていたり、でも昼間はジーンズが多かったり、逆にジーンズ以外のボトムの丈が恐ろしく短いものばかりだったり、ベトナムらしさももちろん感じられて、とても興味深かったです。

また、ホーチミン市師範大学の学生さんたちは、私たちにとても良くしてくれました。私たちの日本語を聞き、私たちがやりたいことを理解して、おすすめの場所を提案してくれたり、道路を渡るときは間に挟んで注意してくれたり、とてもありがたかったです。

パワーポイントは、フィールドリサーチ後に作ります。真夜中まで作業を行いました。フィールドリサーチが楽しく、疲労もあったため、この作業がとてもしんどかったです。



↑ 歓迎会



↑ フィールドリサーチで訪れた市場

2-2 フィールドリサーチ 2 日目

8:00-11:30 発表会の準備

14:00-17:00 発表会と修了証明書の授与式

2 日目は、発表準備と発表会です。

発表準備では、グループ内で、話す内容を共有し、師範大の学生も含め、日本語で発表できるように教え合いました。三重大の学生はできるだけみんなに伝わりやすい日本語を選ぶ努力をし、師範大の学生はその日本語をできるだけスムーズに言えるよう努力する。双方の協力が大切です。原稿を読んでもらってはじめて「この表現は伝わらないな」と気付くこともあったりして、発表原稿チェックの大切さをあらためて感じました。

発表会では、みんなのフィールドリサーチの様子が分かり、とてもおもしろかったです。それぞれ違うテーマを、いろいろなアプローチで調べ、発表しているのを聞いて、同じ時間でこんなやり方があったのだな、と気付きました。また、ベトナムや日本について、さらに考えが深まりました。

結果発表前には、師範大生が、マルマルモリモリを踊ってくれたり、日本語の歌を歌ってくれたり、とっても楽しませてもらいました。発表の結果、私のグループは上位ではなかったけれど、とくに悲しむこともなく、むしろ、そのことより師範大生との別れに悲しみました。みんなでたくさん写真を撮り、時間がある人はチーを食べに行き、さらに時間がある人はそのあとご飯に行って…充実した夜を過ごしました。三重大生のなかにも、

ホーチミンを第2の故郷としたい人が続出。それだけ素敵な思い出となりました。



↑発表準備の様子



↑集合写真

2-3 ホームステイ

20日 12:00 FFSCピックアップ

21日 13:30 FFSC集合

ホームステイは、三重大生のメンバーが1~2人ずつ、ホーチミン師範大生のお宅にお邪魔します。

私は、西村さんと共に、女の子のおうちにお邪魔しました。メイクがとっても上手な女の子で、私たちはメイクをしてもらいながら、一緒に時間を過ごしました。晩御飯は、家庭料理を振る舞ってもらいました。学生以外は、ベトナム語だけを話すのですが、指をさしながら「これはこれと食べるんだよ」「どんどん食べてね」などを伝えてくれて、楽しみながら食事しました。私にとって、ホームステイはとっても刺激的で楽しかったです。

師範大の授業に参加した人、朝早くから教会のミサに行った人、ギターの弦を一緒に張り替えた人、ご飯を作った人、それぞれが、それぞれのホームステイ先で、さまざまな経験をしました。今回は特に、家族との時間が多かったため、「ベトナムの家庭」を感じることができた2日間だったと思います。(文責：谷口)



←頂いた晩御飯

以下、1人1人のホームステイでの過ごし方や感じたことを記載します。

私は、英語でコミュニケーションが取れず、またホームステイという体験も初めてだったので、このプログラムは最も緊張していました。日本から万華鏡キットや焼酎などを持ってきて、ボディランゲージでコミュニケーションがとれるような準備をしていました。しかし、そんな心配はご無用でした。クエンさんは、日本文化(サブカルチャー)が好きで、時間をかけて一生懸命理解しようとしてくれました。多くの時間を一人と共有できるという点で、より深く交流できるよい機会だったと感じています。(野村)

ホームステイをさせてくれた Nam 君は日本の文化にとっても興味があったので、一緒に日本語で歌を歌ったり、日本の漫画について話したりしました。彼のお母さんは高校で数学の教師をやっていたので、僕が大学で学んでいる数学の話をしたりもしました。初めてのホームステイという体験だったので、それなりに緊張もしましたが、家族に温かく迎えられ、日本との生活の違いや考え方の違いを感じることができたと思います。(佐藤)

ホームステイ先の家族のみならず、ご近所・友人の方々など、本当にたくさんの方が歓迎して下さいました。朝食に屋台へフォーを食べに行ったり、近所のみなさんと集まってベトナムコーヒーやチューを楽しんだり、ベトナムの文化を、身をもって体験させてもらえたように思います。ベトナム人のおもてなしの心、優しさに感動すると同時に、言葉が通じなくとも、笑顔でたくさんコミュニケーションをとれることが実感でき嬉しかったです。(豊田)

ホームステイではホーチミン師範大の学生のおうちに一泊させていただきました。僕は去年と同じくクイン君のお家です。去年の反省を生かし、家族とできるだけいっしょにすごしました。家族みんなで作った揚春巻の味は忘れません。家族は僕に本当に親切にしてくれましたし、この絆は一生忘れることはないでしょう。ベトナム人の本当の温かさに触れることができるのがホームステイだと僕は思っています。(中野)



↑ホストファミリーとコーヒー@マクドナルド

ホームステイでは、夕食のとき、言葉が通じなくてもホストファミリーは笑顔で料理を勧めてくれて、とても嬉しかったです。夕食の際、味の濃い食事が多かったですが、飲み物は無く、誰一人お水を飲む人はいなかったため、文化の違いを感じました。また、ホーム

ステイ先の師範大生の方は大学から日本語を学び始めたのに、不自由なく日本語でコミュニケーションを取ることができ驚きました。彼女は英会話教室も開いているとのことで、語学力の高さを見習わなければと感じました。(西村)

FFSC には、私と同じ年のチンさんが私を迎えに来てくれました。1 日目は、おうちで日本語の勉強をしたり、近所のおうちにお邪魔してお話をしたりしました。夜にはベトナム料理をふるまってくれました。2 日目はチンさんに、スーパーや日本人街、オシャレな雑貨屋さんやカフェに連れて行ってもらいました。短い間でしたが、ベトナムの生活を味わえたこと、何と言ってもチンさんとたくさん話げできたことが嬉しかったです。(奥村)

僕のホームステイでは特にどこかに出かけるわけでもなく、家でホストブラザーとゲームをしたりギターを弾いたりして過ごしました。最新のテレビゲームで遊ぶ彼らの姿は僕らと変わらないなど、意外なところで日本とベトナムの学生の共通点を見つけた気分でした。文化の違いを感じたのは夕食時で、その日は家の外で焼き肉を食べたのですが、近所の人たちも集まってのかなり大人数での食事でした。そこでは、日本の都会ではあまり見られなくなった、地域のつながりの強さを感じました。(河嶋)

ホームステイ先に着いて最初にしたことは昼寝だった。どこに行くのかな？なにをするのかな？とわくわくしていたので拍子抜けしてしまった。しかし、海外研修ということで疲れているだろうと気を使ってくれたのかもしれない。比較的家にいる時間が長かったが寝るかテレビを見ていた。この原因として相手が日本語を話せるので、話しかけてくれるのを待っていたことがあげられる。更に、日本語だけで会話をしていたのでベトナム語も使えば良かったと後悔している。次回は相手の国の言語で積極的に話したいと考えている。(榊原)

ホームステイでは、訪問宅のお母さんとお父さんが手作りの美味しいベトナム料理や果物でもてなしてくれました。それだけでも十分満足だったのですが、夕食後には、その家の兄弟と近所を散策し、ベトナムの商業施設を見学することができたり、美味しいお菓子を頂いたり、楽しい思い出を作ることができました。二日目は、お父さんに車を出していただき、ホーチミン市内をドライブしました。フィールドスタディでの移動中には気づかなかった風景を見たり、もう一度見たかった建造物などを見ることができ、新しい発見を得たり刺激を受けることができました。二日間という短い時間でしたが、多くの時間をご家族と共有でき、ベトナム人の生活を直に肌で感じるすることができました。この異国での生活体験は、一生忘れることのない経験となりました。(下山)

(6) JICA 南部連絡所 サイゴン東西ハイウェイ

南北高速道路

9月18日(木)～9月19日(金)

応対者：JICA 南部連絡所 豊田雅朝 企画調査員

1. JICA と ODA

JICA（国際協力機構）は、日本の優れた人材・技術・資金を活用し、発展途上国を援助する ODA（政府開発援助）の実施機関です。ODA には大きく分けて、二国間援助と多国間援助があり、JICA は二国間援助を担当しています。ベトナムには北部と南部の二か所に JICA の事務所があり、南部連絡所では主に南部地域の調整業務をしています。

日本の対ベトナム ODA は、「成長と競争力強化」、「ガバナンス強化」、「脆弱性への対応」の3本柱を中心とし、ベトナム政府が目標に掲げている2020年の工業国化にむけて援助しています。



2. サイゴン東西ハイウェイと南北高速道路（ホーチミン - ゴーザイ間）

サイゴン東西ハイウェイは、ベトナム最大の都市であり商工業の中心であるホーチミン市の交通事情を改善する目的と、周辺地区の生活環境の改善を図り、また開発の遅れているサイゴン川東岸地域の都市開発を目的として作られました。そして、サイゴン川を渡すのに東南アジア最大の沈埋トンネルを敷設しています。全線、2011年に開通しています。南北高速道路は、ホーチミンからハノイを結ぶ大規模な高速道路で、そのうち日本は優先区間であるホーチミン - ゴーザイ間を担当しています。高速道路は、渋滞緩和、都市間移動の時間短縮、交通需要増への対応を図り、ベトナム経済・社会の活性化に寄与します。この区間は2015年開通予定です。両方とも、日本の有償資金協力によって作られています。



3. 感想

ベトナムで、win-win という考え方を知り、相手国のためだけではなく自国の利益も考えつつ援助している、というのにとっても納得させられました。ベトナムに道路を作ることでベトナムにとっては経済の基盤となるでしょうし、外国にとってもそこがビジネスのフィールドとなるわけですから、世界が競って新しいフィールドを開拓しようとしている様が大変興味深かったです。しかし、日本がそのような流れからだいぶ遅れを取っているということも知りました。日本の企業は言うまでもなく世界トップクラスの技術を兼ね備えているにもかかわらず、コミュニケーションが下手なため、ビジネスにおいては海外の会社に負けているそうです。今後ますます、グローバル化がすすむ時代において、これは早急に手を打つべき問題だと思います。日本の企業も、もっと積極的に海外に出るべきだと思いました。

さらに、道路を建設する話で、ベトナム国内だけではなく、他の東南アジアの国にも大きな影響を与えるということを知りました。今までの感覚ですと、別の国というのは単に競争相手だったはずですが、時代は地域対地域、という枠組みに変容しつつあるそうです。ですから、ベトナムの東西、南北の交通網を充実させることで、言葉や文化は違うけれど、ASEAN 諸国が互いに足りないものを補填し合って協力していくことができるようになる、とわかりました。

この二日間は、普段日本にいてはなかなか気づくことのできない、日本の外で起こっている問題を知ることができ、大変貴重な時間となりました。(文責：佐藤)



(7) バリアブンタウ省投資促進センター

9月18日(木) 14:00-14:30 ごろ

応対者：Ms.Nguyen Thi Minh Van, バリアブンタウ省人民委員会計画投資局代表
投資促進センタージャパンデスク職員 藪下成仁さん

1. 概要

当初予定にはなかったが、南部連絡所豊田さんのアレンジで、養護学校への往路に立ち寄った。予定外での訪問にも関わらず、応対者のみなさまはあたたかく、迎えて下さった。軽く自己紹介を終えた後、バリアブンタウ省への外国投資促進への取り組みについて説明を受けた。バリアブンタウ省へは日本からの投資に特に期待。現在日系企業 18 社が進出中。(バリアブンタウ省進出完全ガイドより)

2. 感想

まず、バリア市内の道路は非常に広く、道路の沿線に立派な電灯があったり、走行するバイクの数が少なかったりと、今まで滞在していたホーチミン市内の風景とはがらりと変わる印象を受けた。バリアブンタウ省投資促進センターも、写真にあるように建物が立派である。敷地面積もかなり広そうだった。ブンタウがある地域は石油産業が活発というお話を聞き、その恩恵と言えるのだろう。

投資促進センターは、もともと訪問プログラムに入っておらず、豊田さんのご厚意で急ぎょ立ち寄ることになったプログラムである。それにもかかわらず、実際には部屋も移動して 30 分も時間をとっていただいたので、感謝の気持ちだったバリアブンタウ省の企業誘致政策に関して事前準備をし、もう少しお時間をとって説明をしていただけていたらより充実した内容になっていただろうと思われるところが、少し悔しく思われる。(文責：野村)



(説明を受けているところ)



(バリアブンタウ省投資促進センター外観)

(8)バリアブントウ養護訓練学校

9月18日(木) 15:00-16:30

対応者：JICA 南部連絡所豊田さんアレンジ

青年海外協力隊(美術) 岸田 美香さん

1. 概要

1990年にバリアブントウ省より許可を得て設立された公立養護学校。小学部8年、中学部4年の課程が設けられており、(中学部は2012年開講)、視覚、聴覚、知的障害をもつ6から24歳の計180名が在籍している。また、試行的に4から5才の幼児を14名受け入れ、就学前教育も一部行われている。学校には寮も併設しており、180名の生徒のうち120名は寮で生活、60名は自宅からの通学である。職員の人数は54名(うち40名が教師)。タイの民間企業の支援でコンピューター室が整備されたが、現時点では外国からの支援は受けていない。生徒の学費や食費は無償。

2. 背景

障害者への教育の機会と職業訓練の機会の提供を目的に設立された養護学校。ベトナム全体ではまだ統一された特別教育プログラムが存在せず、それぞれの省の方針でカリキュラムが定められており、当学校では通常5年の初等教育のプログラムを8年間かけて行っている。中等教育4年間の課程(通常と同年数)で行われるなど、徐々に体制は整いつつある。

3. 課題

職業訓練についての整備が遅れ気味であること(わずかに縫製と手工芸が教えられているのみ)。美術教育担当の教師が専門でないため、一般的な指導内容のみにとどまること。そのため、今回の青年海外協力隊派遣の要請がなされた。

4. 感想

先に断わっておくと、岸田さんは赴任されて日が浅く、現場に馴染んでいる最中であること。また、バリアブントウ養護訓練学校は初めて今回のようなスタディーツアーズの団体を受け入れるということ。それを踏まえて、このプログラムは、道に迷い時間を大幅にロスするという出だしから始まる。(渡航前にgoogle mapで調べたが、この辺りは学校の数が多い)前日、ホーチミン市師範大学の生徒さんたちに「ブントウに行くの!いいな～」とうらやましがられるリゾートに来たはずなのに、ブントウ市に隣接するここバリア市は人気がなく、閑散としている様子だった。バリアブントウ省は急速に開発を進めており、この辺りは建設され始めた住宅街という印象だった。人がいない道を大きなバンが右往左

往。私は、このとき、心配でたまらなかった。(途中、間違えて寄った幼稚園らしき場所で園児や先生にお見送りされた光景が忘れられない。)

しかし、そのようなアクシデントもあって良かったのかもしれない。本当に途上国の開発というのは手探りで行う仕事だと身をもって実感した。何もないからこそ、体力も気力も並大抵のものではない。

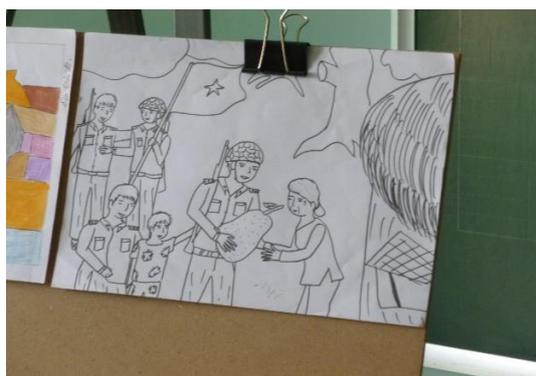
そして、同時に JOCV としてこのような辺鄙な地にたった一人で派遣された岸田さんがいかにタフな精神であるかを実感した。

岸田さんは、社会主義国らしいトップダウン型の教育や、国の急速な成長に伴うつめこみ型教育に対する疑問を感じておられる印象が強かった。美術の授業でも枠をはみ出さずに色を塗ることや、手本の通りに絵を描くことを中心に教えるのだという。日本との違いは大きい。

その後、岸田さんの案内で養護学校の教室を見学すると、手話で会話したり、先生が長い定規を持っていて聴覚障害の生徒さんたちに合図を送ったりと、養護学校らしい光景を見ることができた。生徒さんたちは明るくはつらつとしている印象だった。ハンデに負けることなく強く生きてほしいと願っている。(文責：野村)



(説明を受けている様子)



(生徒さんの作品)



(学校前で集合写真)



(岸田隊員の後ろ姿)

(9) ブンタウビーチでの夕食交流会

9月18日(木) 18:00-20:00

JICA 南部連絡所 企画調査員 豊田雅朝さん

青年海外協力隊(美術) 岸田 美香さん

バリアブンタウ省投資促進センタージャパンデスク職員 藪下成仁さん

バリアブンタウ大学 杉江太郎さん 松山純也さん

1. 感想

夜のオーシャンビュー（気持ち良い！）を望む高級レストランでの交流会は非常に充実した時間だった。青年海外協力隊員、岸田美香さんと JICA 豊田さんのセッティングで3人のベトナム駐在中の日本人の方々に来ていただいた。とにかく、みなさん人柄がよく、エネルギーで面白い。特に藪下さんとは席が近く、帰国後も face book を通じてやりとりがあり、この場を借りて少し紹介したいと思う。以下は、藪下さんが作成された「中間報告書 ベトナム Vung Tau Life」より引用したもの。

「海外で働く。」

私は今の仕事を通して、“海外”という存在がより身近にあるものだと感じるようになりました。大学時代の友人のなかには、「日本で能力や経験を積まないと海外で働くのは難しい。」という人もいますが、私はそのように考えません。日本語教員という職種のみならず、営業や開発、事務などの他の業種においても、海外で働くチャンスはあると考えています。もちろん、先進国の労働者だけで組織された会社への就職は、難しいかもしれませんが、でも、これから発展していくアジア諸国やその他の発展途上国では、経験が多少あれば、いや何かを生み出したいという思いと少しの勇気があれば、あらゆるチャンスに恵まれていると確信しています。怖くても、一歩飛び出すだけで、勇気なんて後から付いてくると思っています。そんなもんだと思っています。

海外で働くことのみならず、身の丈に合わないなんて一線を引かずに、チャレンジ精神をもつことの大切さ。ベトナムでご活躍されている皆さんのいきいきとしている姿が何よりの証拠だと思います。(文責：野村)

(10) ホーチミン市都市鉄道建設事業

9月19日(金) 10:00~11:30

対応者 ホーチミン市都市鉄道1号線建設事業 増沢達也プロジェクトディレクター

1、プロジェクトの概要

ベトナムのホーチミン市を含む南部地域では、急激な経済発展とともに人口も大幅に増加し、バイクや自動車による激しい交通渋滞や大気汚染が社会問題化してきています。これらの地域では今後も交通需要の増加が予測されており、物流の効率化や渋滞の緩和、環境保全のための都市鉄道のような新たな大量輸送手段の整備が求められています。これをうけて、地下鉄を含む都市鉄道建設の計画が進められています。

私たちが訪問した日本工営は、ホーチミン市都市鉄道1号線建設事業のプロジェクトのコンサルタントを担当しています。ホーチミン市では、都市鉄道建設のプランがすでに出来上がっており、6路線が提案されています。日本の鉄道システム、技術規準、ICカードの導入が予定されています。既存鉄道であるベトナム国鉄保有路線は、全て単線、非電化、ディーゼル機関車牽引であるため、これは、ベトナムで初めてとなる電化された都市鉄道のプロジェクトです。この6路線のうち、最初に工事実施が具体化されたのが1号線で、円借款にて事業が進められています。プロジェクト全体の事業規模は2400億円です。1号線は、ホーチミン市の中心ともいえるベンタン市場前を起点とし、国道1号線に沿って北東約20キロメートルを結びます。ベンタン市場から3つ目の駅までの2.2キロメートルは地下鉄です。工事は地下区間土木、高架区間・車両基地土木、鉄道システム・維持管理の3つの部門に分けられています。全線開業予定は2020年となっています。

2、訪問した感想

今のベトナム国民にとっての交通手段は自動車が増えてきているとはいえ、ほとんどがバイクでした。このままの勢いで人口増加が進んでいけば、環境問題に直面するのは目に見えています。日本のように国土が鉄道で張り巡らされ、鉄道が交通インフラとして力を発揮するのはまだ随分先にはなるでしょうが、地球全体のためにも鉄道の整備は急いで取り組まれるべきです。

さらに、こういった援助を日本の国費でやる以上、日本の企業の利益を少しでも考える必要がありますが、そもそも国際援助とは各国が国境を越えて互いに協力し、被援助国の手助けとなるよう努めることが何よりだとも思います。それぞれの考えの板挟みの中、うまく諸外国と連携をとって海外で仕事をするのは非常に難しいということも分かりました。そのため、日本人は海外で仕事をするのがあまり上手ではないという話もあったように、今後はもっと日本人も若いときから積極的に海外に出て、英語できちんと相手と話す機会を増やしていくことが重要だと思います。

そして、鉄道とは人や物を、一度に大量に遠くまで運ぶことができるものです。今まで電車、ましてや地下鉄がなかった国で、実際に鉄道が走っていることを想像すると、その時が楽しみにもなりました。(文責：佐藤)

(11) ホーチミン工業大学重化学工業人材育成プロジェクト

9月19日（金） 14:00-15:30

応対者：JICA 専門家（チーフアドバイザー） 林田隆之氏

国際協力センター Nguyen Quang Vinh 氏

1. 概要

JICA が 2013 年 11 月より 3 年間を目途に、ODA による技術協力を行っている案件です。ベトナムでは、2020 年までの工業化を支えるエネルギーの供給は、極めて重要な課題とされています。そのためベトナム政府は重化学工業の振興に力を注いでいて、それを運営管理する技術者を必要としています。出光や神戸製鋼などの資本参加、日本の高等専門学校モデルの導入試行といった日本の協力も加わって、現在ホーチミン工業大学における重化学工業人材育成能力を強化するという活動を行っています。概算協力額は約 2 億円です。主な活動内容としては、以下のようなものが挙げられます。

- (1) ホーチミン工業大学（以下 IUH）のティンホア分校において重化学工業、特に製油産業分野における、より実践的、創造的な人材を育成すること
- (2) IUH と地場産業界や周辺コミュニティとの人材育成に係る連携を強化すること
- (3) IUH と関係政府や他の教育訓練機関、地域社会の間で、実践的技術者育成モデル（高専モデル）促進に向けた関係を構築すること

2. 感想

今回の訪問で私たちの訪問のアレンジを下さったのは林田さんです。私たちが IUH に到着すると、すぐさま大きな部屋へと案内して下さいました。その部屋には大学幹部の方々とおよそ 20 名の学生の方々がすでに集まっていて、私たちを温かい笑顔で迎え入れて下さいました。英語での挨拶・大学紹介を終えたあと、学生同士で英語での交流を行いました。その後、大学の方に案内して頂きながら校内を視察、最後に学生の方々と少し話し、プログラム終了、といった流れでした。そんな中で私の心に強く残ったことが 2 点あります。

1 点目は、やはり学生の方々の“学びたい”という姿勢です。最初の英語での交流の際も、その英語力、質問に対する積極性、質問内容（日本の大学ではどんな勉強をしているのか、日本で学びたいのがどうすればよいか、というような内容の質問が多くありました）に日本人は、とりわけ私は圧倒され、非常に驚きました。校内を見学しているときも、研究室や実験所で見学している私たちの存在に気付き、若干反応するものの、学生たちは熱心に自らの作業に打ち込んでいました。また、私は事前学習で、IUH の学習カリキュラムは日本の大学のそれに比べ厳しいものであると把握していたため、学生たちは学生生活が大変

なのではないか、授業を辛く感じているのではないだろうか、と想像していました。しかし実際の彼らは、そんな心配ご無用と言わんばかりに、“キラキラした目”、もっと学びたい！！と強い意欲をもった目をしていました。そんな彼らを見ていて、今の私たち日本人学生は、向上心に欠けるということを実感しました。人並みであれば良い、とりあえず安定した生活を送ることができれば良い、というような風潮を、ベトナムに比べれば強く感じます。確かに人並み、現状維持といったことは大切ですが、今後の発展は望めません。一方で、若い世代がこれほどいきいきとしているこの国は、今後必ず発展していくだろう、と改めて強く感じました。

2点目は、その学習環境です。学内の研究設備は想像していたよりもずっと整えられており非常に心強く感じたのですが、気になったのが、授業時間中に廊下にいる学生の数の多さです。図書館の席は大体埋まっており、比較的狭い廊下にたくさんの学生の姿がありました。現在およそ6万人という莫大な数の学生が在籍しているとのこと。それでも以前は10万人の学生を抱えていた時期もあり、今は国から学生数が規制され、少しは減少したとのこと。学生一人一人からそれほど多くの学費をとることができないという理由もあって、大学側としてはできる限り多くの生徒を通わせたいという思いがあるとのことですが、やはり学生が多ければ1人当たりの学習施設は少なくなり、学習環境が悪化すると考えられます。さらに学習環境の問題は設備だけに留まらず、教員の質にも及ぶといいます。日本とは異なり、ベトナムの大学の教員は学生の就職のことを重視していないため、大学で学ぶことと産業界が求めていることがうまくリンクしていないとのこと。このことは、特に産業界と直結しているIUHでは非常に大きな問題であり、日系企業からの支援として、教員の指導が行われているほどであるとのこと。せっかくあれほど勉強熱心な学生がたくさんいるのに、非常にもったいない、というのが私の率直な感想です。そして改めて、私たちは非常に学習環境に恵まれているのだと実感しました。研究や就職等どんなことでも先生に質問・相談することができ、先生は親身になって応じてくれます。空いた時間があれば図書館で勉強したり調べものをしたりすることができますし、研究室などの設備も大変整っています。当たり前ではないその環境を当たり前とし、持て余している、今の日本をそんな風と感じました。

以上のように、IUHを訪問する中で、プロジェクトの必要性を感じたり、IUHが抱える問題点を見つけたりすることができ、ベトナムの産業面、教育面ともに理解が深まったように思います。また改めて自分たちがいかに恵まれた環境に置かれているかを再確認する機会ともなり、今後の意欲向上にも繋がりました。本当に貴重な経験をありがとうございました。(文責：豊田)



(12)エスハイ KAIZEN 吉田スクール

9月19日(金) 16:00-17:30

応対者：エスハイ社 社長補佐兼エスハイ KAIZEN 吉田スクール副校長 里村勇祐さん

1. 概要

「存分に学び働くことができるための意識・能力を育てる教育」をベトナム人に与え、その教育を受けた、優秀なベトナムの「人財」を、日本企業に提供、そしてそのベトナム人財が日本の高度な技能・技術・知識を得て帰国する、という流れにより、日越両国が共に発展することを目標としている事業です。

ベトナムでの人材教育や研修事業、技能研修生派遣事業、また、ベトナム人技術者や高度人材の紹介、ベトナム進出総合コンサルティングなどその事業内容は多岐にわたります。

2. 感想

今回の私たちの訪問は、最初にエスハイ社についての紹介 VTR を見た後、その後里村さんのお話を伺って実際に授業の様子を見学し、最後にまとめとして、授業見学で感じたことをみんなで共有しながら、再び里村様のお話を伺うという流れでした。

多くの驚きや感動がありましたが、そんな中でも最も印象的だったのが、授業見学です。私たちは授業、中でも朝礼の様子を見学させて頂きました。生徒の方々は私たちが教室に入ってくるなり、「こんにちは！」と非常に元気のよい挨拶をかけてくれました。1人で5人分くらいの声の大きさに挨拶をしてくれていたと思います。教室には椅子がなく、20名ほどの生徒の方々はみんな、机の前で正しい姿勢で立っていました。先生が、「誰か自己紹介をして下さい。」と言えば、生徒の方々全員が「はい！はい！」と大きな声を上げながら手を挙げます。正直、日本では考えられない光景でした。そして先生に当てられた2名の方が自己紹介をしてくれました。日本語を勉強し始めてまだ1年も経っていないという2人でしたが、大変すらすらと日本語で話してくれました。すごいのは日本語の上手さだけでなく、その内容です。「～という目標があって、日本で働くために、ここで学んでいます。将来は～になりたいです。」というように、私たちの前で自分の夢を、目標を公言してくれました。日本人以上に、日本人が、日本の企業が求めている人格である、と強く感じました。その一方で、日本の企業で働くためにはここまで徹底しなければならないのか、生徒たちは辛くはないのだろうか、という疑問がわいてきました。もっと自分らしさを残したまま日本で働くことができる方法があればいいのに、と強く感じました。

その後、里村さんのお話を伺う中で、先ほど挙げたような疑問に対する答えが見えてきました。里村さんは、「日本企業のやり方があるからこそ出せる日本の高品質があり、その流れは決して崩してはいけないものとされています。だから、外国人労働者にも日本のやり方が求められるのです。」とおっしゃっていました。この言葉に、私は大いに納得し

ました。少し過剰とも感じる程に、エスハイの学生たちは日本の労働者像に近づいていました。しかしそれが、世界中で安心される日本品質を守ることに繋がっているのです。さらに、エスハイの学生たちは、エスハイでの勉強や訓練をやりたくてやっている、とおっしゃっていたのも非常に印象的でした。“～という目標があるから、だからやりたくてやっている”“押しつけはいや”そんな、ベトナム人特有の考え方により進んで学習をしている様子でした。なかなか日本にはないものであり、日本人が見習うべき点であるな、と強く感じました。

現在日本は急激な少子高齢化により、生産年齢人口は非常に減少しています。そしてこの傾向は今後も持続、またはますます高まると言われています。これからも日本で、日本品質のものを生産していくためには、若い外国人労働者の存在が必要不可欠となってくるでしょう。その数は、近い未来にきっと大幅に増加するのでは、と私は思います。今後労働者のグローバル化が進んでいく中で、日本はあまり日本のやり方に固執しすぎないことが重要になってくると思います。エスハイのように、今ほど外国人が日本に歩み寄ってくれることは少なくなるだろうと思います。日本企業、外国人労働者がお互いに自らの守るべきところは守って、気分よく楽しく、素晴らしい職場を築いていける未来を期待しています。そして自分が、エスハイで出会ったような外国人の方々と一緒に仕事をし、切磋琢磨しながら成長しあえる日々を心から楽しみにしています。(文責：豊田)



2. ハノイ

(1) ベトナム日本人材協力センター (VJCC)

9月22日(月) 11:00-12:00

応対者：ベトナム日本人材センター（ハノイ）グエン・ティ・ヒエン副所長

JICA 本部日本センター事務局 乙黒 令子さん

1. 概要

ベトナム日本人材協力センター（通称 VJCC）は日本とベトナム両国政府の合意のもと設立された人材育成機関です。ベトナムの市場活性化に資するビジネス人材を育成し、日本語教育や様々な交流事業を通じて、両国の相互理解を促進しています。

(1) ビジネスコース (2) 日本語コース・簿記コース (3) 相互理解促進事業・留学支援といった事業が行われています。更に、図書館が設置されており日本語教育に関する書籍をはじめ、経済、ビジネス、文化関連の書籍や視聴覚教材を取り揃えています。

2. 事業内容

(1) ビジネスコース

ベトナム政府の工業化政策に沿って、ベトナム国内の企業のニーズに応える研修コースを実施しています。

(2) 日本語コース・簿記コース

初・中・上級の高度な日本語や日系企業の求めるオフィス日本語、ビジネス日本語、日本語で学ぶ簿記コースを学べる貴重な場所となっています。

(3) 相互理解促進事業・留学支援

日本に関する情報を提供し、日本社会・文化への理解を深めるため、様々な交流を行っています。ビジネスコース、日本語コースを補完的な役割を担う事業を実施しています。

3. 感想

今回の訪問では、連絡の行き違いでアポイントが取れていないことが直前に判明しましたが、訪問当日は、1時間も時間をとっていただき丁寧な対応をしていただきました。まずは、VJCC の行っている事業についての説明をしていただきました。日本人材協力センターは東南アジア、中央アジア地域の9か国に設置されていますが、ベトナムだけがホーチミンと今回訪問したハノイの2か所に設置されているのです。このことから、日本とベトナムのつながりの強さを感じました。

その後は図書館に案内していただきました。日本のファッション雑誌や小説、国語

辞典等が置いてあったことがとても印象的でした。図書館はビジネスコースや日本語コースに参加している方だけでなく、一般の方も利用されているそうです。日本語を学ぶ意欲の高さに驚きました。わたしは今、意欲的に何か学習していることはあるだろうか、と思いました。他国の文化に興味をもち言語を学ぼうとする姿勢を見習わなくてはいけないと思いました。大学では様々なジャンルの講義が行われているため、絶好の学ぶチャンスを存分に生かしたいと思います。

お忙しい中、本当にありがとうございました。(担当：豊田、文責：榊原)



説明をメモする VFS メンバー



玄関にて集合写真

(2)バックマイ病院

9月22日(月) 14:00-15:30

応対者：保健医療従事者の質の改善プロジェクト 伊藤 智朗 チーフアドバイザー

1. 概要

バックマイ病院は1991年に設立された、ベトナム北部最大の基幹病院です。北部地域の下位レベルの医療機関を指導する役割を持っており、医科大学・看護大学の実習教育病院でもあります。バックマイ病院に対し、JICAは、過去に無償資金協力(1998-2000)を、現在は技術協力(2000-2015)を行っています。今回は、バックマイ病院を訪問し、伊藤専門家の話を伺い、実際に病院を見せていただきました。この活動を通して、ベトナムの医療・保健制度の現状と、ベトナムの医療・保健分野に関するJICAの取り組みについて学び、考えました。

2. 感想

最初、バックマイ病院の訪問は、メンバーに医学や看護学を学ぶ学生がいないこともあり、想像のつきにくいプログラムのひとつでした。生命に関わる大切な分野とは知りつつも、“医者＝とても難しい勉強”というイメージからとっつきにくさを感じていたメンバーもいたと思います。しかし、伊藤専門家がベトナムの医療について、ディスカッション形式で、私たちの知識に合わせてお話して下さったことで、医療について身近に考えることができ、大きな気づき・学びを得たと思います。

まず、私が、ベトナムの医療のお話で驚いたことは、2つあります。1つは、ベトナムの医療の指数が良いということです。私は、先進国と呼ばれる国に住んでいて、発展途上国と呼ばれるベトナムは医療面でもまだ整っておらず、あまり良いとは言えない状況であると考えていました。確かに、日本と比べると差はありますが、他の東南アジアの途上国と比べると、ベトナムは良い数値を持つ、医療に対して比較的しっかりと取り組む国であると分かりました。他国を見る時、自国である日本とばかり比べがちですが、他国を他国と比べることで、見える結果もその国に対する印象も変わることを実感しました。2つめは、ベトナムと日本が同じ問題で悩んでいることです。国民が「軽い病気でも大きな病院で診療を受けたがる」という点が、共通の問題であるそうです。私は、大きな病院に紹介状がなければ高いお金を出さなければならない日本のシステムが面倒で嫌だと思っていました。しかし、実際、バックマイ病院に人があふれているのを見て、これでは必要なひとが必要な処置を受けにくいだろうな、とすぐ分かりました。紹介状、という面倒と思える処置は、問題解決のためにあり、必要なものだったと気づきました。更に、私の考えていたことが、医療環境が全く違うと思っていたベトナムの人と一緒にいることに驚きました。自分の国になると自分本位で考えて見えなかったことが、他国で同じ問題を目にするこ

で、客観的に考え、素直に捉えることが出来ると感じました。

また、ベトナムの医療援助の話も興味深く感じました。ベトナムでは、医療に関しても多くの国、多くの団体から援助が行われているそうです。しかし、政府同士だけでなく各国のさまざまな団体がベトナムの様々な機関と結びついて援助を行うため、すべての援助の把握が難しく、すべての援助が効率的に行われているかは分からないそうです。いままで、今まで、軽い募金などで「いいことをした」と思っていた私は、募金されたお金がどう使われているかなんてあまり想像していませんでした。援助は、簡単にできるものもありますが、核心に近づくほど難しいものなのだな、と思いました。JICAの現在の技術協力の1つに、基幹病院から、下位病院への研修制度を整える、というものがあります。私は、成果について気になり、研修制度を整えることで下位病院が良くなったのかを気にしましたが、「病院がよくなる」ことには、教育が行き届くだけでなく、機材やルールの整備など、さまざまな要因が必要だそうです。なくてはならない援助ですが、JICAの技術協力だけでは分かりやすい結果はみえない、というところで、プロジェクトに携わる人々の大変さを少し想像することが出来ました。

とてもきれいな外観をしている中で、2人で1つのベッドを使う光景や最新の設備の使いこなせない、手洗いなどの衛生が徹底されない現実があり、そのなかで教育系援助が行われていて、ベトナムでは医療に関しても、たくさんの援助を受けながら「今まさに動いている」という感触を得ました。(文責：谷口)



↓ 外来の待合ロビーの様子



← 病室

(3)NCnetwork 大塚代表講演会・日本人駐在員との夕食会

9月22日(月) 16:40-17:40(講演会)、18:30-21:00(夕食会)

応対者：大塚哲久さん(NC network Vietnam 代表取締役)

山内祐奈さん(ICONIC)

長谷川舞さん(IDE INTERNATIONAL)

中村公美さん(FUJI XEROX VIETNAM)

武内玲さん(Sunrise Advertising Solutions)

小野宏輝さん(テクノタイヨー)

1. 概要

NCnetworkは、海外に進出しようとする日本製造業に対して現地調達支援、現地進出支援、営業支援の3つのサービスを提供する会社です。情報供給元として、また営業ツール提供企業として、さらには海外進出・海外調達支援を行うコンサルタント企業として、日本製造業の海外進出をバックアップする活動をしています。

講演会の後は、NCnetworkの大塚様のお声かけにより集まって下さった、ベトナムで活躍されている計5名の方々と夕食会でした。およそ20~30代という、若手の駐在員の方々が集まって下さり、年齢が近いこともあって大変話やすく、勉強になるだけでなく非常に楽しい場となりました。

2. 感想

(1) 大塚代表の講演

まずは大塚さんのご講演についてです。最初は高いビルの高い階にオフィスを構えるNC network Vietnamに、足を踏み入れるだけでも緊張していた私ですが、大塚さんにお会いし、お話を伺っているうちにそのような緊張はいつきに解れました。それほど、大塚さんのご講演は学生にも非常にとっつきやすい内容で、

思わず海外で働きたい!と夢を抱いてしまうようなものでした。大塚さんの今に至るまでの経緯や海外旅行記、海外から見た日本の強さ弱さ、さらには大学生である私たちにとっては最も重要なテーマともいえる、職を探すことについてなど、幅広くお話して下さいる中で、特に私の心に強く残ったことがあります。それは、私たち若者には、華やかな世界に惑わされず、地道な世界を受け入れる気構えで頑張してほしい、という言葉です。海外という一見華やかに見える世界で働くことは素晴らしいことのように思います。しかし、何年もの我慢を通じて基礎を大切にする修業時代を経て、社会人としての知性・人格



を身につけてから、そのような華やかな世界に出て頑張ってもらいたい、と大塚さんはおっしゃいました。この言葉は大塚さんの見聞や苦勞からきていると思います。海外で働くことによって、海外と日本を切り離すのではなく、日本の良さをしっかり身につけた自分が海外で働くことによって、やっと本当の楽しさに出会えるのではないだろうか、そんな風に思えました。私もまた大塚さんのお言葉通り、しばらくは日本で頑張っておこうと考えています。そして、また機会があればぜひ海外でも働きたいと考えているのですが、その時までにはぜひとも、社会人としての知性と人格を身につけておきたいと思っています。

(2) 日本人企業駐在員との夕食会

どの方も本当に気さくな方ばかりで、自分の大学時代の話から現在の生活の様子、またベトナムで働くことの楽しさや苦勞話など多岐にわたって楽しくお話をして下さいました。そのお話からも学ぶことはもちろん多くありましたが、私の心に最も印象深く残ったのは、みなさんの表情でした。海外で働くことには、もちろん言葉の壁や文化の違いがあり、苦勞は尽きないことと思います。それでも、どの方も大変明るい表情をされていて、やはり海外での仕事は新鮮で楽しい面も多いのかな、と思わず期待をしてしまうほどでした。年齢が近い方々とのお話は、やはり自分たちにとって身近に感じることができ、非常に貴重な経験をさせて頂いたように思います。本当に楽しい時間をありがとうございました。(文責：豊田)



(4) ベトナム国家農業大学 (前ハノイ農業大学)

9月23日(火) 9:00-11:00

応対者：シニアボランティア小嶋洋之さん、中野年継さん、
ベトナム国家農業大学の教員・学生の方々

1. 概要

ベトナム国家農業大学(Vietnam National University of Agriculture)は、1956年に設立されたベトナムで最初の国立大学であるハノイ農林大学を前身とし、2008年に現在のベトナム国家農業大学になりました。2014年3月に改名し、ハノイ農業大学からベトナム国家農業大学となりました。作物学部、獣医学部等の農学系学部のほか、文系の学部も含む12学部、大学院、5研究所からなります。学生数は3万8千人、教員数約は1300名です。生物工学部は2008年に設立され、動物工学科、生物学科、微生物工学科、植物工学科、分子生物・応用生物工学科の6学科から成っています。稲作研究所は2005年に設立され、ハイブリッド米の開発を中心に、イネ以外の多様な作物の育種も研究しています。欧米や日本を含むアジア各国の大学との共同研究や学生・教職員の交流を活発に実施しており、また1998年から2004年にJICAの技術協力プロジェクト「ハノイ農業大学強化プロジェクト」を実施、2010年から「作物品種開発プロジェクト」を実施中です。

2. 感想

ベトナム国家農業大学に到着して、まずは植物工学研究所の中を見学しました。研究所の中では交配により品種改良された沢山の種類の苗が育てられていました。苗が育てられている部屋は温度、光、湿度を常に調節しているそうです。苗は瓶に入れられたものとビニールに入れられていたものが並んでおり、研究室を案内してくださった方にその違いについて質問したところ、大学での研究用のものを瓶に入れ、企業に売る苗をビニールで包装しているそうです。日本の大学では企業に研究で作ったものを売るという取り組みは珍しいため、日本とベトナムの大学の違いを感じました。

研究室見学の後に、ベトナム国家農業大学の学生の方と英語で交流しました。交流の前にグループの名簿が渡されたのですが、このとき交流する学生の方のほとんどが女性だと分かり、驚きました。農業大学なので、品種改良や育種やバイオテクノロジーなど、とても専門的で理系的な学問を学んでいるため、男性が多いイメージでしたが、研究所を見学した際も女性の方が多く、ここでも日本とベトナムの違いを感じました。日本では理系は男性、文系は女性という漠然としたイメージが根付いていますが、日本は理系と文系という違いに執着し過ぎなのではないかと改めて感じました。

交流では、ベトナム国家農業大学の学生の方の英語力に驚きました。学生ほぼ全員がスラスラと英語を不自由なく話していて、かつとても良い発音で聞き取りやすかったです。

日本の大学生で英語を不自由なく使える人は多くないと思います。またベトナムの学生の方との交流で、将来の夢は何かと尋ねたところ、全員がすぐに自分の夢について具体的に説明していて、モチベーションの高さにも感動しました。将来的に、これから私たちは日本国内の人だけではなく、ベトナムなどのアジアの人々とも競争していくことになると思いますが、今の私では英語力、専門知識だけでなくモチベーションなどでも劣っているのではと感じました。私を含め、日本の大学生はこのような同世代のベトナムの学生の現状をしっかりと知るべきだと思いました。これは私が個人的にベトナム国家農業大学の学生さんと連絡を取って知ったことですが、ベトナム国家農業大学での専門的な授業の一部は英語で行われるそうです。ここも日本との違いで、英語を知らないと専門的な授業を受けることができないという状況が生まれ、多くの工夫をして自ら英語を学んでいるとのことでした。まだ英語の授業は一部ですが、大学は今後増やしていく方針を掲げているそうです。それを知って、私も自分で進んで英語に触れ、専門的な内容も学んでいきたいと感じました。

交流の後に、大学から 15 分程歩いて、稲の品種改良などを研究している圃場を見学しました。圃場はとても広く、日本とは少し違う雰囲気でした。そこではハイブリッド米とインブレット米が研究されていました。私は生物資源学部ですが、この時の説明はとても専門的で、少し私には難しかったです。このとき学んだことを挙げると、ベトナムでは食料安全保障において収量を増やす必要があり、ハイブリッド米が盛んだそうです。ハイブリッド米はジャポニカ米とインディカ米など、できるだけ遠い種を掛け合わせることで収量が上がるそうです。インブレット米の研究では主にインディカ米を使っており、天気、害虫、病気に強い種を研究されているそうです。この研究所ではハイブリッド米が 14 種成功し、そのうち 3 種は特許を取得されているそうです。圃場見学の後、シニアボランティアの小嶋さんと中野さんに質疑応答の時間を設けていただきました。ベトナムでの農業人口はとても多いですが、日本と同じように農業人口は減少しつつあるそうです。この研究所で、育種した種のブランド化などもされているか質問したところ、独自開発の品種があり、種子会社に売ったり、コンサルティングをされたりしているそうです。また、ベトナムでは温度や湿度が高いため稲などが病気になりやすく、農家は農薬を使わない方を好むため、品種改良で白葉枯れ病などの病気に強い品種を作ることは重要であるということが分かりました。

ここで、帰国後にイネの病気に関する追加資料をいただいたので紹介します。下のひとつ目の写真は健全なイネと白葉枯病に罹病したイネの比較だそうです。罹病したイネは茶色く枯れ上がっています。ひとつ、あるいは数個の抵抗性遺伝子があるかないかでこのような差が出てしまうそうです。この病気はベトナムでは重要なイネの病気で、抵抗性遺伝子は昔ながらの人工交配によって導入し、遺伝子組み換え技術は使いません。もうひとつの写真はひとつ目の写真とは別の場所の写真で、左のイネは収穫が終わっていますが、右のイネはひどい病気で枯れてしまい、収穫されずに残っている写真だそうです。また、中

央はあぜ道です。質疑応答の中で印象が強かったのは、お話の中で出てきたバイオチャー(BIOCHAR)というものです。バイオチャーとは、バイオマス(稲わらやもみ殻など農業廃棄物)を嫌気性条件下で熱分解することで得られる炭素の塊のことです。バイオチャーは二酸化炭素を固定するだけでなく、土を豊かにし、化学肥料などを使わなくてもしっかりと農業を長く続けることが可能になるそうです。私はバイオチャーを初めて知ったためとても興味深かったです。

シニアボランティアとしてベトナムで活躍されるお二人を見て、私自身も頑張らなければと感銘を受けました。また、私自身が生物資源学部にも所属していることもあり、品種改良などの農業分野を専門として活躍されていることを本当に尊敬しました。今回の訪問は、私の興味のある分野と関連していたのでとても楽しかったです。また学生の方々やシニアボランティアの方々と出会いを通じて、モチベーションが上がりました。この経験を今後活かしていきたいと思います。(文責：西村)

9月20日撮影

追加資料 1



健全なイネ 罹病したイネ



10月10日撮影

追加資料 2



(5)アジア作物学会・第8回アジア作物学会議

9月23日(木) 13:30-15:00

ベトナム国家農業大学にて

1. 概要

アジア作物学会 (Asian Crop Science Association) は、各国の作物学会が加盟する国際的な連合組織で、4年に1回アジア作物学会議を各国で開催しています。第8回目のアジア作物学会議は、「グローバルな気候変動と食料安全保障に対応するための持続可能な作物生産」をテーマとして、2014年9月23日～25日にハノイ農業大学で開催されました。今回の会議は、気候変化を含む環境上及び作物学で最も新しい現在の進歩に反するそれらの経験及び研究結果や、作物生産における影響、作物改良への分子的なアプローチや作物形態学へのアプローチ、生理学、地球の気候変化や食料安全保障に対応する生態学、耕作などに関する研究結果や経験を交換、共有する機会を重要な科学者、研究者及び学者に提供することを目的としています。

2. 感想

私たちは今回、第8回アジア作物学会議の午後の部である Parallel session の Session1(Climatic Change and its impacts on crop production and society)を聴講しました。発表は全て英語で行われたため、私たちにはとてもレベルが高いものでした。また、ネイティブの方が英語を話しているわけではないため、独特な発音を聞き取ることが難しかったです。国際的な学会は、ある分野の専門家が国境を越えて集まり研究内容を共有する研究発表会であるため、英語で行うことが一般的です。研究内容を日本だけでなく世界へ発信し、また他の世界中の研究者の研究内容を知るためにも英語は必要不可欠であると強く感じ、改めて英語の重要性について考えるきっかけとなりました。また、ネイティブのようにスラスラ話したり、正しい文法を使ったりすることが大事なのではなく、世界中の人に伝わる英語を話す、理解することが重要であり、グローバルイングリッシュの習得を意識することも今後の私たちにとって大切なことだと感じました。学会の発表内容は厳しいイメージを抱いていましたが、パワーポイントで題名が波打つアニメーションが付けられていたりしたので意外でした。全部英語でしたので、理解できたところは少ししかありませんでしたが、途中で分かりやすいパワーポイントのページや図の紹介の仕方などを見ることができ、参考になる部分はたくさんありました。国際的な学会で発表することは専門家などだけではなく、学生にも関係することで、文系や理系関係なく、このような発表の機会は珍しくありません。このような学会を聴講したことで国際的な学会の雰囲気や発表方法などを体感でき、私たち大学生にとってとても貴重で有意義な経験になったと思います。三重大大学の江原教授も発表予定であったため、聴講できたら嬉しかったのですが、

日にちが合わず聴講できず残念でした。発表聴講の後は研究内容のポスター展示を見に行きました。その時に江原教授に発表予定の研究内容を説明していただき、とても興味深かったです。国際的な学会を日本以外で聴講できる機会はとても貴重であるため、本当に良い経験となりました。この経験を生かして、国際的な場や、英語での発表などに積極的に取り組めるよう努力したいと感じました。(文責：西村)



(6)ハロン湾

9月24日(水) 10:00 – 16:30

午前

- ① SATREPS植林事業 (ベトナムおよびインドシナ諸国におけるバイオマスエネルギーの開発による多益性気候変動緩和策の研究プロジェクト)
- ② バイオトイレ

午後

- ③ JICA 草の根技術協力事業 (ハロン湾における海上輸送を基盤とする廃棄物循環システム構築事業)
- ④ マングローブ植林事業

対応者

- ・ Mr. Pham Tuan Anh (トアン・アイン) : ハロン湾管理局・環境管理室所員
- ・ Ms. Do This Huyen Trang (チャン) : ハロン湾管理局・環境管理室所員
- ・ Mr. Do Thanh Van (バン) : クアンニン省林業生産・種子センター・生物工学室副部長

通訳

Mr. Luong Viet Dung (ズン)

内容

ハロン湾の現状とかかえる問題

ハロン湾はベトナム北部のトンキン湾北西部にあり、ハノイから東へ車を走らすこと4時間ほどで到着します。3000もの奇岩・島々が存在し幻想的な風景を醸し出しているこのハロン湾は、1994年にユネスコの世界遺産に登録されました。過去この付近では質の良い石炭がよくとれ、露天掘りで石炭を採掘していたと言われています。現在は世界遺産であることから観光客がますます増え、またハロン湾には水上生活者がおりそれも観光客を呼び込んでいます。ハノイといえばココ！と言われるほど有名な場所ハロン湾ですがさまざまな問題を抱えています。

露天炭鉱開発とは鉱山の表面を削っていく採掘方法であるため、当然表面はもろくなりその結果土壌流出が起こっています。観光客の増加により生活排水問題が悪化、水上生活者による廃棄物投棄・生活排水問題も目立ちます。それにより水質汚染も発生。これにより、世界遺産が取り消されるかもしれないと言われています。

改善するには…？

そこで、JICA は現地地方政府と協力しあいそれを改善する手立てを考案・提案しました。ハロン湾への協力は当初、技術協力事業として開始されました。この技術協力の終了後、現在行われているのが…草の根技術協力事業（以下、草の根事業）や SATREPS です。

キーワード解説

● 草の根技術協力

国際協力の意思を持つ日本の NGO や大学、地方自治体などによる協力活動を、JICA が政府開発援助の一環として促進することを目的とした活動のこと。今回の草の根に手を挙げたのは大阪府立大学と堺市でした。

※草の根無償資金協力事業とは異なります。

● SATREPS

(Science and Technology Research Partnership for Sustainable Development)

地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム。地球温暖化や感染症の対策をはじめとして、世界の抱えるさまざまな問題を科学・技術的な面から協力することによって解決しようというものです。今回の場合は植林技術協力でした。

これらの問題をそれぞれ見てみると、①土壌流出の原因は「木がない」こと。②水質汚染の原因は「不法投棄」と「生活排水」。また、水質汚染のさらなる原因はハロン湾の人々の意識でした。これらの原因を取り除くことを目標に活動は始まったのです。

現在、草の根の取り組みは①植林。②ゴミ拾い。です。

植林とゴミ拾い

言うだけでは簡単ですが、これをいかに「持続的に」「同時に」行うかが課題でした。水上で活動を行うため輸送船が必要。輸送船を動かすためには燃料が必要。その燃料を工夫し、バイオディーゼル燃料（BDF）としました。原料の種は鉾山に植え、緑化を施し土壌流出を抑えようというものでした。その肥料を水上生活者や観光船の出すゴミをコンポスト化したものからつくる。輸送船はそれを回収する。という循環システムが考案され実行されています。

地域住民の意識改善（現在の草の根活動ではない）

地域住民はハロン湾の環境に対する意識レベルが低かったため、JICA や地方政府が協力しあい環境教育の一環として意識レベル改善を行ってきました。現在は食器洗いにスポンジではなく網を使用するように指導しています。

現地はどうなっている！？

では、実際に現地ではどれほどこの事業が進んでいて、どのような影響を与えているのか。活動現場の実際を視察してきました。

僕ら VFS メンバーはハノイ農大と続き、通訳者のズンさんとともにハロン湾へ向かいました。偶然にもズンさんは今回訪問するハロン湾のプロジェクトの通訳を以前経験されており、僕らよりも詳しくハロン湾プロジェクトについてご存じでした。ハロン市に入りベトナム側カウンターパート機関の三人とお会いして、レクチャーを受けながら SATREPS 植林事業現場へ。

キーワード解説

● カウンターパート

JICA をはじめとした国際協力活動でよく用いられる用語で、現地の協力機関のこと。今回はハロン湾管理局とクアンニン省でした。

① SATREPS 植林事業

試験的に 100 本の BDF 燃料素材が取れる木が植えられた場所へ向かいました。周囲には露天掘りにより丸裸になった真っ黒い鉱山地帯が広がっており、地面は砂、石、岩で構成されていました。養分がほとんどない悪条件でも育つとして植えられているのが *Jatropha* (ジャトロファ) という植物です。BDF 燃料の油がとれ、土壌改良にも効果的ということから植林されています。1 本ごとにコンポストを与える量を調整し試験的に育てられています。この油を用いて輸送船が運航可能かどうか試験を行い、現在ハロン湾にある観光船 600 隻を 100%純度 BDF で運航可能にすることを目標としています。ジャトロファによる緑化の目標は 3 万 ha です。



Jatropha (ジャトロファ)

SATREPS の課題

この植林事業は持続可能に見えて非効率的であり難しいミッションです。なぜなら、コンポストをハロン湾から集めるにしても、時間もかかるしコストもかかる。なにより、コンポストが絶対的に不足してしまうからです。また、観光船 600 隻を賄うには 1000ha の植林が必要とされており実現が難しいです。3 万 ha を緑化するなど不可能でしょう。ハロン市からかき集めたコンポストを運び込んだり、政府から支援金が出たりしなければ難しいと僕は考えています。

② バイオトイレ

今回の草の根とはまた違った事業でバイオトイレという環境にやさしいトイレが設置されており、それを見学しました。水なしで、においもない、24時間たてば堆肥になるという素晴らしいトイレです。VFSメンバーからの人気は絶大でミーティングでも噂になるほどでした。日本にほしい！と言っていた人もいましたが、僕は日本のトイレが好きです。

トイレを見学した後で、みんなでお食事でした(笑)。ハロン湾管理局の方からお話を聞くことができ、有意義な時間となりました。



③ (1) コンポスト場～海上輸送による廃棄物循環システム構築事業～

高速ボートに乗り込みハロン湾に繰り出しました。スピードがとても速く、皆興奮気味でした。船に揺られること数十分。水上村が姿を現しました。まずは、水上村のコンポスト場へ。今はもう水上住民は地域政府の政策で陸へ移動しており、このコンポスト場はほとんど使用されていませんでした。ここには水上で集められたゴミが多く集められており、これを運びだす仕事が残っているそうです。



③ (2) 水上村 -Vong Vieng Village (ボンヴィン村) -

～海上輸送による廃棄物循環システム構築事業～

水上村の一つを訪れました。水上教室が残っており、机やイス、黒板もありました。陸から先生が1年間派遣され水上で暮らしたそうです。今はもう水上住民がいないことから使われていませんでした。水上村では特に小中学生に対して環境意識教育が行われていたそうです。基本的に水上村の男性は漁業、女性は観光業を担当していました。



水上村

水上村の課題

子供が学べるように、水質を悪くしないように、仕事につけるようにと陸へ住民を移動させたのです。しかし、陸に上がっても仕事につけない者が多いことや、水上に仕事がある者は子供を連れていってしまうため結局子供が学べないこととなり矛盾を抱えています。それをどう解決するのか、それが課題です。

④ マングローブ植林

ハロン湾の水質改善にマングローブ植林も行われていました。マングローブ林は土壌侵食を抑え、生態系を維持し、水質を浄化する作用があります。植林をしてもなかなか生存することができないので、それも課題の一つとなっています。



植林されたマングローブ

まとめ

以上のようにさまざまなアプローチでハロン湾の水質は改善されようとしています。今後、ハロン湾周辺に住む人々の意識が改善され、政府がこの水質改善活動を重要視し、「住民・政府・自治体」が協力しあえるようになれば、ハロン湾の景観は守られていくことでしょう。

感想

今回の活動は草の根技術協力と呼ばれる、援助団体が名乗り出て JICA と共同で実施する形のもの。日本の NGO・自治体・大学が名乗りを上げることがすばらしいと思った。なぜなら、援助とは誰かにやれと言われてやるものではなく、自らがやろうと思ってやるものであるからだ。これは援助の形として理想的なものだと思った。持ち合わせ秘めている技術という面で見ると研究の場である大学、日々その地域の問題に直面し解決してきた自治体の技術を活用すれば、より高レベルの支援が期待できる。この部分がこの草の根事業の根っこであると思う。なぜなら、支援対象地域は一つではなく、多種多様であるからだ。多種多様な支援ニーズに対応できるのは多種多様な経験・知識をもつ大学・自治体である。また、大学としては研究したことをアウトプットでき、大学・自治体とも自己 PR ができるようになる。自分の強みを生かして、支援もできて、自己 PR もできる。草の根事業はまだ JICA の支援活動のメインとは言えないかもしれないが、草の根事業はより活発になってほしい。

最後に

トアンさん、暑い中僕らに付き合ってくださいありがとうございました。貴重な経験ができました。

通訳のズンさん、ハロン湾を熟知しているズンさんにお問い合わせできたことは偶然にも幸いなことでした。お願いしてよかったと思っています。2日間お世話になりました。

ハロン湾管理局・クアンニン省の方々、そして通訳のズンさんありがとうございました！！！（文責：中野）

～水上の思い出たち～



風でふわあああつつつてなる先生と佐藤



水上で死闘を繰り広げるわんこたち



水上村でお勉強

(7) ドンラム村

9月25日(木) 9:00-14:30

対応者：ドンラム村遺跡保存管理事務所グエン・チョン・アン副所長

青年海外協力隊員 鴨川 靖史さん（ドンラム村遺跡保存管理（建築））

石川 裕也さん（ドンラム村遺跡保存管理（民間連携ボラン

ティア／コミュニティ開発）

1. 概要

ハノイ都心部より南西に40キロのところにあるドンラム村には数多くの伝統的な民家があり、さらに建物の敷地の構成、街路等の村全体の構成、集落内に配された様々な公共物も伝統的な形態を保ち、村全体が伝統的な姿を保っていることに大きな価値があることから、2005年に村全体が国家文化財として指定されました。最近では観光スポットとして注目され、私たちが訪れた日もたくさんの観光客が訪れていました。

2. 感想

今回の訪問では、午後から建築分野で活躍されている鴨川さん、コミュニティ開発分野で活躍されている石川さんのお二人のお話を聞かせていただきました。まず私たちは、ドンラム村の責任者であるアンさんからアドバイスしていただき、お菓子作りをする組と散策組の2グループに分かれ午前の時間を有意義に過ごしました。私はお菓子作りに参加しました。ドンラム村では、ケオラクやチエラムといったお菓子を作り、生計を立てている家庭がたくさんあります。私たちは、砂糖や水あめ、ナッツを鍋に入れ溶かしかき混ぜる作業を手伝いました。甘い、いい匂いが部屋の中に漂い完成がとても楽しみでした。溶かし終わると次は、机の上に囲いをつくり、そこに先ほどまで熱していたナッツたちを流し込み手作業で伸ばし始めました。この作業が一番大事な過程だそうです。最後は個別包装し、袋に詰めました。個別包装と袋に詰めた後の封は機械で行いました。そして、お土産にと一人一つずつ完成品をいただきました。お菓子作りは英越通訳者のフーンさんと、ご厚意で早く来ていただいた鴨川さんのお



↑機械で個別包装を行う

かげで楽しい時間となりました。その後散策組と合流し、テイ邸というお宅にお邪魔し鴨川さん、石川

さんのお話を聞かせていただき、ハイロイ邸で昼食もご一緒させていただきました。

「伝統的な生活を守ろう」という政府の要望と、「エアコンをつけ、快適な生活をしたい」

という村人の要望に挟まれ、葛藤があるそうです。実際に石川様が生活しておられる村の伝統的な部屋に案内していただきましたが、とても蒸し暑く、快適とは言えない環境でした。他人事であるなら、伝統家屋を守ろうと言えるかもしれませんが、いざ生活しようと考えれば快適な生活をしたいと思うのは当然のことであるでしょう。政府の要望と村人の要望との折り合いの難しさを感じました。私は今まで協力隊は、派遣先の要望に応えるだけで答えのある仕事だと考えていました。しかしそれは間違いでした。支援をしていくと必ず、支援先の人々が「援助慣れ」してしまうそうです。協力隊の方々は援助慣れしないように、かつ人々が自立し幸せになれる方法を模索していかななくてはならないのだ、と気づきました。そして、そのためには、村人たちとたくさん話をすること、仲良くなることが大切だと教えていただきました。お話以外にも、ドンラム村内を案内していただきました。村内はとてもゆっくりした時間が流れており、VFS最終日とあって疲れのたまっていた私たちを癒してくれました。さらに、お邪魔したお宅では、必ずお茶を出していただき丁寧なおもてなしをしてくださり感動いたしました。今回の訪問では、協力隊員がどうあるべきなのかということも学ばせていただきました。本当にありがとうございました。(文責：榊原)



↑モンフー門にて集合写真

VI 感想

参加した1人1人による、ベトナムフィールドスタディの感想です

ベトナムフィールドスタディを振り返って

人文学部 文化学科 4年 谷口佳実

ベトナムフィールドスタディは、想像以上に面倒くさくて、想像以上に楽しいプログラムでした。

長縄先生からメールが届いたとき、1年生の時にとった地域研究ベトナムの授業をおもいだしました。そういえば、あの時ベトナムに行きたくて授業受けたのに結局行かなかったなあ、ということ思い出して、軽い気持ちで返信しました。

そんな軽い気持ちで返信したのに、夏休み中の勉強会、ベトナム側のプログラム関係者との連絡など、想像していなかった面倒くさいことがどきどきやってきて、ベトナムフィールドスタディが、夏の一大イベントに変わってゆきました。謎が多い長縄先生と、まだまだ打ち解けあえないメンバーたち（しかも若者ばかり）、毎回長引く勉強会…もしかして、楽しくないプログラムなのかな？と不安になりながら、当日を迎えました。

しかし、いざ、ベトナムに着いてみると、少しハイテンションになったみんなとはすぐ打ち解けあえ、長縄先生はひにひに面白さを増して魅力的に（古巣ハノイでは格別）見えてきて、様々なプログラムを受けながら、充実した日々を送ることができました。

さまざまな人に話を聞き知ったのは、ベトナムという国が、日本にとって、いかにチャンスにあふれた場所かということです。現在、ベトナムは、どんどん発展に向かって成長しようとしています。そこで、日本が昔発展する際に培った経験や考え方が求められているそうです。このプログラムでは、大きなものでは、鉄道や道路のインフラ関係、小さいものでは日本語教師など、広い範囲で「日本人の持つ経験」が生かされている現場をすることができました。日本にいたときは、「ベトナムと日本の協力」というと、国と国の利害関係としか想像つきませんでした。実際につながりのひとつひとつを見ることで、「ベトナムと日本の協力」というのは、現場で、企業と企業や、人と人が、「日本人の経験」を教えることでつながっている様子が良くわかりました。

また、そこから考えたのは「援助とはなんだろう？」ということです。現在、発展を続けるベトナムには、たくさんの国、団体から援助があります。「援助合戦」状態になっているそうで、その理由には、単なる「発展の援助をしたい」という気持ちだけでなく、どの国も、「発展した時」の自分の利益を考え支援を行う面もあるそうです。しかし、私は、ベトナムで過ごし、いいところを知るうちに、「援助合戦」と「自国の利益のための支援」というキーワードから、「もし、自国の利益のためだけにベトナムに本来必要なさそうな支援が行われたら…」と少し悲しくなりました。もちろん、大きな支援であるほど、支援する人に見返りもなきゃできないのですが、だからこそ「ベトナムに必要」で、「支援する人にも利益がある」支援を行って欲しいと思いました。JICAの方や、長縄先生に話を聞く限り、JICAの取り組みでは、そのことはしっかり考えられているそうです。でも、これから

は、ニュースなどで情報を集め、援助についてもっと考えていこうと思いました。更に、援助だけでなく、自分が仕事などで、ベトナムと関わる時も、そのことを忘れないようにしたいと思いました。ベトナムの人と出会い、その優しさや素晴らしさに触れる機会を得たのだから、相手をただの「自分の利益を上げるためのモノ」としてではなく、もっと触れ合いを大切にして、win-win の関係を築けるよう努力したいと思いました。

私は 4 年生で、卒業するので、これからの学生生活の充実や、就職についてこのプログラムが影響することは少なかったのですが、社会人になる前に知れて、考えることができてよかったと思うことがたくさんありました。私たちのために、様々なことを教えてくれた担当者の方々に本当に感謝の気持ちです。また、1.2 年生のフレッシュなみんなと行動したおかげで、いろいろなことを素直に感じることができました。ベトナムで出会った人だけでなく、メンバーのみんなにも感謝します。

ベトナムは、フォーもチャーもおいしいし、水上人形劇はかわいいし、観光だけでもとても魅力的だったと思いますが、フィールドスタディーで、ベトナムの子どもたちや学生と触れ合ったり、様々なプロジェクトが行われているのを知ったりすることで、より身近に感じる事が出来ました。行ってよかったです。

感想

人文学部 文化学科 4年 野村由衣

今回のベトナムフィールドスタディツアーは、自分の視野を広げる経験となりました。

そもそも、なぜ大学生活も終わる4年生のこの時期に参加を希望したかという、私は、途上国の貧困格差に興味があって、1年生のときにベトナムフィールドスタディ A という事前授業に参加しました。しかし、志半ばでベトナムスタディツアーへの参加をやめてしまいました。そのことがずっと自分の中に引っかかっていた。

では、この3年間、何をしていたかという、と大学祭実行委員会の活動を一生懸命行っていました。しかし、3年生の運営をやり終え、自分の思っていた成果を上げられずに、なにか“もやもや”する気持ちで就職活動にうつりました。VFS はそんなときに新たな視点を与えてくれました。過去の自分を客観視しても出てこなかった根本の理由は、視野の狭さだと思います。人や他文化に触れることで、自分の中にあつた閉塞感が少し和らいだように感じます。

過去の私はベトナムフィールドスタディ A の受講や、海外旅行に出掛けることを通じて、日本のことを何も知らないと感じました。国内で通用する人間が初めて、国外に目を向けるのではないかと、思い、自分の中でのベクトルを国内に転換させました。そうやって、範囲を狭めていくうちに、そのベクトルの太さが極端になっていたのかもしれない。

VFS 中にお会いした方々はみなさん魅力的でした。特に、みなさんの持つハングリー精神に驚きました。ベトナムに駐在し、日系企業や日本語教師として働く日本人の方々はもちろんのこと、歳の近いベトナム人学生さんの向上心や学びに対する姿勢には本当に心がゆれました。私自身も過去の自分の学びに対する態度を反省するばかりでした。モチベーションの違いは、日本とベトナムの経済状況や、ベトナムの中でも都市と田舎にある生活水準の違い等、さまざまな背景があり、一概には言えないと思いますが、何にせよ、純粋に目的に向かう人たちの姿には心が洗われました。

私は、今後、身近なことから少しずつ途上国に対する NGO 活動に関わっていけたら良いなと考えています。今回、ストリートチルドレン友の会 FFSC、ビンチュウ開発センターに行くことで、より開発援助組織の存在を身近に感じることができ、今後の自分に少し勇気を持たせたと思います。

余談ですが、ベトナム料理は辛いものが苦手な私にとって、困ることはなかったし、どこに行っても出てくるパクチーの風味も好きでした。また、お土産にと市場で買ったベトナムコーヒーも後に残る香りが最高です。Home stay で可愛い友達もできたので、また、休暇を利用して是非ベトナムに行きたいと思います！

宿題

工学部 物理工学科 2年 佐藤諒太

「あなたの夢はなんですか。」

私はたくさんのベトナムの大学生と交流し、自分の名前を名乗るほどの自己紹介をした後には、何度もこの質問をされました。この質問に答えられる日本の大学生がどのくらいいるでしょう。おそらく、ほとんどいないと思います。夢を持って大学に来ている人はほんの一部で、ほとんどの学生はなんとなく大学に通っているような気がしてなりません。私も例外ではないのですが…。しかし、彼らに同じ質問を返してみると、彼らは胸を張って、キラキラした目で大きな夢を語ります。そして口をそろえて、「お金持ちになりたい」と言うのです。それは私にとってはものすごい出来事でした。

ホームステイの際に、どうしてみんなそのように夢を語るのか、ということについて聞いてみました。すると、「今持っている夢というのは、自分が最初から本当になりたいと思っていたわけではなくて、ほとんどの場合は、進路を親が決める。けれど親がお金を払ってくれるからこそ、勉強することができるし、勉強すればお金持ちになることができる。だから、両親のためにお金を稼ぎたいからだ。」と答えてくれました。私は彼らが勉強するモチベーションというのが自分のためではなく、家族のため、ということにとっても驚きました。それまでの私には到底ない感覚でもありました。

今、日本国内では積極的に海外の人材を受け入れる流れができつつあります。私たちもエスハイカイゼンスクールという、日本に出稼ぎに行くベトナム人を教育する施設を見学しました。そこでは、会社でコミュニケーションをとるために必要なことを叩き込まれていました。ベトナムの学校教育では、どの強化も暗記する量が膨大らしいです。これはベトナムで必要とされているのは、簡単な問いに対して瞬時に答えをはじき出せる人が多く求められているからではないでしょうか。よって、日本がこのような政策を進めていくと日本人より海外の人を雇用した方が人件費を抑えられるため、簡単な仕事はますます海外の安価な労働者に流れ、高給な日本人の雇用の機会が減ることが考えられます。このままではマズいと、これからの将来を考えると本当に恐ろしい気持ちになりました。

ベトナムで様々な人と話すのは本当に楽しかったのですが、彼らに負けたくない、という気持ちにもさせられました。全然学ぼうとしない日本人に対して、貪欲に学ぼうとし、家族のために働こうと目をぎらつかせている若い世代がすぐそこにたくさんいたのです。そして、日本で当たり前のように大学に通って勉強できるということがとてもありがたいことだと気づかされました。日本で、両親が大学に通わせてくれているということに対して感謝の気持ちを持ち、このチャンスを無駄にすることなく私も彼らのようにもっと貪欲に勉強したい、とつくづく感じました。今回の良い経験を今後どう活かしていくか、いつか形として表すために、自分に対しての宿題として常に心においておこうと思います。

たくさんの素晴らしい出会い

生物資源学部 共生環境学科 2年 豊田瑞穂

最近暇だなあ、時間もあることだし海外にいきたいなあ…と、そんな漠然な思いを抱えていた私に一通のメールが届きました。ベトナムフィールドスタディは、本当に、そのたった一通のメールから始まった、始まりは「なんとなく」のものでした。しかしこのツアーを終えた今、私は心の底から参加を決めて本当に良かったと思っています。ベトナム現地でしか味わえないような貴重な経験ができたから、ベトナムと日本の関係性をたくさん知ることができたから、と理由は数多く浮かびますが、やはり私にとっての一番大きな理由は、たくさんの素晴らしい出会いを得ることができたから、というものです。

まず、多くのベトナム人大学生に出会うことができ、本当によかったと思っています。今回はたくさんの大学、学生と交流の機会を得たのですが、中でも交流の時間が長かった、ホーチミン市師範大学の学生との出会いについて述べたいと思います。最初、私たちが招かれた教室に入ると彼らは次々に日本語で話しかけてくれました。その言葉に多少の間違いはあるものの、その間違いがどうしてもよく感じるくらいに積極的に、楽しげに喋りかけてくれました。街中で日本とはまったく異なる道路の様子やスリの危険に私たちが脅えていると、彼らはすぐに私たちを守ってくれましたし、食事の場では日本のことをもっと知りたいとたくさんの質問をしてくれました。中には日本語のみならず英語も流暢に話すことができる学生や、もっと勉強をして奨学金を取得し日本に留学したいと意気込む学生、今しっかりと勉強して将来は〇〇になりたい、と会って間もない私たちに夢を語りかけてくれる学生など、なかなか日本では出会うことができないような、勉強意欲に溢れている学生が多くいました。彼らの目は熱意で本当にキラキラと輝いていて、思わず、今の自分では負けているな、と強く感じました。当たり前のように大学生になり教育を受けている毎日ですが、今ある環境にもっと感謝し、もっともっとたくさんのことを吸収できる毎日にしたい、と彼らに出会って強く感じることができました。

次に、ベトナムで活躍する多くの日本人の方々に出会うことができ、本当によかったと思っています。日系企業に勤め活躍されている方や JICA の職員として活躍されている方、青年海外協力隊の方など、訪問先や夕食会にて本当にたくさんの方々とお出会いし、お話を伺うことができました。どの方も共通して、自分の今までの経験を洗いざらい話して下さり、自分の経験を踏まえて私たち大学生が今すべきことを、真剣にこちらに語りかけて下さったように思います言葉の壁があり、文化や人々の価値観が大きく異なるベトナムでの生活は、本当に言葉では言い尽くせないほどの苦労があると思います。しかしどの方も、本当に素敵な笑顔で、前向きに目標をもって日々頑張っている様子でした。海外で働くことに対してこれまでなんとなくネガティブなイメージをもっていた私ですが、ベトナムという発展途上にある国だからこそ存在するビジネスチャンス、現地の方々や現

地で出会う日本人との絆に本当に惹かれました。今後社会に出て仕事をする中で、きっと海外と関わりをもつ機会は少なからずあると思います。そんなとき、積極的に行動し、ぜひ海外で仕事に携われたらと強く感じることができました。

最後に、今回のベトナムフィールドスタディのメンバーと先生に出会うことができ、本当によかったと思っています。学年・学部ともに異なり、普通に過ごしていればまず出会うことができなかったこのメンバーですが、このツアーを通し、本当に仲良く楽しく、良い刺激を与え合える仲間になれたように思います。ベトナム人の勤勉さに感動していた私ですが、メンバーの勉強熱心さ、積極性にも非常に感動しました。12日間どのプログラムにおいても必死にメモをとり、話し手に質問を投げかける彼らを見ると、日本人もまだまだ負けていないなと心強く感じられ、自分ももっと頑張ろうと思うことができました。彼らとは、アジアに、世界に関心をもつ仲間として、今後ともいい刺激を与え合える関係でありたいと思います。

はじめは本当に「なんとなく」のベトナムフィールドスタディでしたが、私はこの12日間で言葉では言い表すことができないほど多くのものごとを学び吸収し、たくさんの素晴らしい人々と出会うことができました。ベトナムで受けた刺激を、学んだことを忘れずにまずは残りの大学生活、いろんなことにとにかく挑戦し、じっくりと考え、たくさんのことを吸収していきたいと思っています。本当に、ありがとうございました。

思い立ったが吉日。

工学部 分子素材工学科 2年 中野成彦

VFSはホーチミン師範大、ホームステイ、エスハイカイゼンスクール、NC-networkと訪問しました。

ホーチミン市師範大学では僕は下山と組み、「ベトナムから見た日本&日本から見たベトナム」というテーマで発表をしました。路上アンケートを行い、幅広い年代層と大学生を対象に調査を行いました。アンケートを集計していくうちにわかったこと。それは。日本人はベトナムへの認識が甘く、ベトナム人は日本のことをよく知ってくれているということです。日本人はベトナムという名前は知っているが、世界のどこにベトナムがあるのかもわからず、その歴史も、食文化もよく知らず、ベトナムには興味がないという人が多かったのです。それなのにベトナム人は日本のことを良く学び、日本に行きたい！日本が好き！と言ってくれる人が多くいました。日本の食文化もよく知っており、日本語を学ぶ人もいました。日本からすればこの逆は少なかったのです。これほどまでにベトナムが日本について興味を持ってきているにも関わらずです。



リサーチメンバー

日本人はベトナムと聞くと悪いイメージを持つ人が少なくないのです。もちろん、僕もその一人でした。しかしながら、ベトナムの人たちは優しく、親切で、努力家で、打ち解ければとてもいい人たちなのです。しかしこれは「打ち解ければ」の話です。日本人はそれを知らず、最初からバリアを張ってしまう。その精神的なバリアはベトナム人にも伝わってしまうのです。最初から敵意をむき出しにして、警戒心をもっている人と仲良くなろうという者はいないでしょう。本当ならベトナム人は（例外はいても）良い人たちばかりであるのに、もったいないことです。ホームステイはそのバリアをなくすための絶好の機会だったと思います。



エスハイの金次郎

エスハイでは日本で働くため日本語を学ぶ人たちを見た。彼らの意気込みと覚悟は尋常なものではなかった。彼らは生活をよくするため、日本が好きだから、日本で働きたいからと色々な理由から日本語を学んでいた。日本はこのままでいたら食われる。そう思った。

ベトナムから日本へ。その動きはあるのに、日本からはないのか。日本は大丈夫なのか。日本からベトナムへ動きはないのか。そう思ってしまふ。しかし、日本から離れたこのベトナムで活躍する日本人たちがいました。

バリアンタウではベトナムの政府機関、学校などで働く方々とお食事をする機会がありました。NC-Network では大塚代表のお話を聞き、その夜にはハノイで活躍する日本人の方々と夕食会をしました。バイタリティあふれる彼らは共通して同じことを言います。「ベトナムに来たからこそわかる。日本はすごいんだ。日本にいたら気づくことはないんだよ。ベトナムという発展途上国へ来て、僕らは日本のすごさを知っ



ブンタウ夕食会

た。この国は日本を求めている。(もちろん一概には言えないけれど)日本人だというだけで雇ってもらえる、日本人のキャラクター、能力、日本語は大きく評価を受けているんだよ。過去の自分たちがそうだったように。日本人はそれがわかっていない」と。その彼らにさらに共通することがあります。それは、「好奇心」です。彼らは続けます。「今、何かやりたい。やってみたいと思った」

「ベトナムには何かある。面白そうだ。だからここへ来たんだ」「今までの自分を変えたい」
…。



ハノイ夕食会

僕は思います。日本人は自分を過大評価している。しかし日本では何の意味もない。なぜなら、皆が日本人だから。それに気づかず、それがゆえに動かず、外にバリアを張り、ほかの国に興味を持とうとしない。それがゆえに、日本は世界に追い付かれ、追い抜かれていく。ベトナム(海外)は日本の人材を求めているのに。もし、動くことができれば、世界に足を踏み入れれば、この人たちのように活躍できる人材となるだろうに。何も知らずに日本が取り残されることもないでしょう。彼らは自分を日本人として評価する・しないの問題以前に、動いた人たちでした。日本人が皆、彼らのように世界で働けばいいとは思わない。でも、自分は日本にいるのではない。世界にいるんだ。そう認識し、動くだけで、知ろうとするだけで大きく自分を変えることができる。

具体的に自分が何をすればいいのか。それはまだ見つかっていません。でも、なにかやってみようと思ったら、マイナスにばかりとらわれずどんどん動いてみよう。動いたもの勝ち。思い立ったが吉日かな。とそう思えたのが今回の旅で得られた最も大きなものでした。

あ、思えば今回のVFSも。「思い立ったが吉日」その一つかもしれないなあ。

ベトナムでの成長

生物資源学部 資源循環学科 2年 西村奈々

ベトナムフィールドスタディに参加することで、沢山のことを学びました。毎日が充実していて、こんなに濃い日々を過ごしたのはこれが初めてだと思います。まず、ベトナムに行く前に事前準備として担当訪問先についての説明を發表し、またサマリーシートの作成をしました。私は人前で何かを説明することが苦手で、この事前準備でもかなり緊張してしまい、ベトナムへ行くのが少し不安でした。また、ロジ担当が車の管理（ホーチミン担当）で、運転手の方に英語で何時にどこに来てほしいかを英語で伝え、連絡を取る担当になったので、それも不安の一つでした。ベトナムに渡航し、まず待ち受けていたのが不安の一つである車管理の担当。初めて連絡した時、今どこにいるか聞いたところ、ベトナム語の地名らしきものを繰り返されて意味が分からずパニックになりました。車担当専用の携帯を持ち歩くのも、いつ携帯が鳴るか分からなかったのが怖かったです。携帯はお話を聞かせていただいているときや、見学しているときでも鳴りました。しかし、毎日運転手の人と電話や直接やり取りするようになって、少しずつ英語での会話や携帯の扱いにも慣れることができました。運転手の人最初はいつも気難しい顔をしていましたが、何日か経つと車を降りるときに笑いかけてくれるようになりとても嬉しかったです。毎日の移動は車が主であったため、責任が大きく、英語での会話や携帯を持つ責任などとてもやりがいのある担当で、かなり自分の成長につながったと思います。このロジを担当できて本当に良かったと感じました。

私が一番印象に残っているのはハノイ農業大学への訪問です。まず大学の違いを大きく感じました。大学の研究で品種改良した苗を企業に売るなど、企業とのつながりが強いことに驚きました。また学生の方は女性の方が多いことにも驚きました。一番驚くことが多かったのは学生の方との交流です。報告書の方でも書きましたが、ほとんどの学生の方が英語を不自由なく話していて本当に驚きました。またモチベーションや専門的なこと、コミュニケーション力も高く、同じ大学生として私はこのままじゃいけないと少し焦りを感じました。交流した学生の方々は生き生きして交流するのはとても楽しかったです。今でもメッセージを英語で送りあって交流を続けており、英語の勉強法などを教えてもらったりしています。同じ専門を勉強している学生との交流は私にとってとても有意義な経験になりました。これからは彼らを見習って英語や専門的なことなどの勉強を日々努力していこうと感じました。

たくさんの訪問先を訪問させていただいて、ベトナムと日本とのつながりを強く感じました。JICAの支援や青年海外協力隊の協力内容、シニアボランティアなど、知らないことばかりでもっと知りたいと興味が深まりました。ベトナムで現場を直接視察しに行くことで、日本で勉強しているだけでは得られないような学びも多くありました。写真や文章だけでは学べないことはたくさんあると思います。独特の雰囲気やにおい、音、人、すみに

落ちているごみ、温度など、現地に行かなければ分からないことばかりです。ベトナムへ行って沢山の衝撃を受けました。その衝撃は実際に行かないと体感できなかったものばかりです。バイクに轢かれそうになったり、屋台の多さや落ちているごみの量に驚いたり、見たことのないフルーツやよく分からない虫を食べたり、沢山の経験をしました。百聞は一見に如かずで、直接自分で足を運ぶことの重要性を実感しました。また、沢山のベトナムの方とも交流できました。ストリートチルドレンとの交流やホーチミン市師範大学でのフィールドリサーチ、ホームステイ、ホーチミン工業大学、ハノイ農業大学の学生の方々との交流など、本当に沢山の方と出会い、日本との共通点、違いなどを多く体感することができました。

このベトナムフィールドスタディでは、ベトナムで活躍されている方々にお話を聞かせていただく機会が多かったです。中でも、ブンタウでの夕食会で聞かせていただいたお話が一番印象に残っています。人間は唯一、目標の達成に向けて頑張ることができる動物である、意見を言わなければ特に問題も起こらずに楽に過ごせるが、人間として生きている実感がなくなってしまう、というものです。意見を言うことが苦手な私にとって衝撃が大きかったです。せつかく人間に生まれたのだから、人間としての喜びを得ることが大事であるという考え方は私の中にはありませんでした。自分には無い考え方を知ることが、沢山の人と出会って会話をすることが大切です。私にとってこの出会いはとても大きいものであると感じました。このお話を聞いて、苦勞が無ければ人間としての生きている実感を得られないし、成長もできないと強く感じ、今後はこのお話を常に意識して行動しようと思いました。

このフィールドスタディを通して、沢山成長することができたと思います。毎日、振り返りミーティングで自分の感じたことなどを発表するときでも、最初は緊張であまり言えなかったりしましたが、毎日繰り返すことで、人前で話すことにかなり慣れることができましたし、通訳の依頼のメールやお礼のメール、他の人のメールのやり取りを見るなど、礼儀正しいメールの書き方を学ぶこともできました。またベトナムと日本とのつながり、ベトナムとの共通点や違いなどを体感して、考え方や見え方が少し変わったり、もっとたくさんを知りたいと興味も深まりましたし、英語という共通言語の重要性や人との出会いの大切さに気づけたり、、、。私はベトナムで二十歳を迎えましたが、日本で成人するよりも成長して帰ってきたと思います。最初は不安でいっぱい、失敗もしましたが、本当に参加したことを心から良かったと思っています。実際に行かないと分からないことばかりですし、ベトナム、日本について知ること、人との出会い、学べること、成長する機会が詰まった 2 週間でした。私はこのベトナムフィールドスタディに参加できて本当に運が良かったです。このような経験のできるチャンスを逃さぬよう、沢山の人にこのスタディーツアーに参加してもらいたいと感じました。これからはこの経験を楽しかった思い出だけに留めずに、一歩踏み出して行動に移し、勉強や就活、将来の仕事など全てにつなげていきたいです。

ベトナムでの13日間を通して

人文学部 文化学科 1年 奥村香遥

私がVFSに参加しようとした理由は、海外に興味があったから、そして前期の授業でベトナムについて調べたことがあったからというものでした。VFSの中でベトナムの文化や、日本人の海外での生活の仕方を知ることができればいいな～といった軽い気持ちで応募しました。今では、VFSに参加できて本当によかった、こんな些細な理由ではあったけれど応募してよかったと思っています。

このVFSではたくさんの方々に出会うことができました。そしてそれらすべての人たちからたくさんの刺激を受けました。師範大学の学生とは、当たり前のように日本語で会話をしていたのですが、今思うとすごいことだなと感じます。また、他の大学の学生も流暢に英語を話していたのですが、私はすぐに英語が話せないどころか、相手の英語が理解できなくて、そんな自分が情けなくなりました。英語を話せるようになれば、世界中のたくさんの人と会話ができる、このことを知り英語が国際的な言語なのだと改めて実感しました。また学生と話をする際、将来の夢について語るときが多くありました。ベトナムの学生は、夢や目標を持って大学生活を送っていることを知りました。日本でもそのような人は大勢いるとは思いますが、みんなが大学へ行くからというように、なんとなく進学した人も大勢いるのではないかと思います。私もその一人かもしれません。そのようにして進学することも悪いことでないかもしれませんが、夢や目標を持って生活をする方が充実した毎日を送ることができるのではないかと思います。私は、ベトナム人のように自信を持って、夢や目標を伝えることができるようになりたいと感じました。ベトナムで暮らす日本人の方からは、何か興味をもったことがあればすぐに挑戦してみようというアドバイスをいただきました。日本人の方から話を聞くと、昔からベトナムに来ることを想像していたわけではないことから挑戦することの大切さが分かりました。今こうして報告書を書いているのも、応募しようと思った些細な理由があったからです。VFSのメンバーからも、たくさんの刺激を受けました。学年、学部、志望理由、関心事などが異なるものばかりだったこともあり、同じ訪問先でも私が考えもしなかった意見や質問が出てきて、そのどれもが私にとって新鮮なものでした。

VFSで学んだことの1つとして、事前勉強会の大切さが挙げられます。最初、私が担当したベトナムの概要についてしかわからなかったのですが、勉強会のおかげで訪問先について知ることができました。発表の準備は大変でしたが、この事前の準備と発表を通しての理解があってこそ、今こうして感じるが多くあるのだと思います。事前勉強会は、訪問先について理解することだけが目的なわけではありませんでした。話し合いをする中で、このVFSは自分たちで作りあげていくものであることを実感できました。徐々に日程が決まっていくのを感じて、とてもわくわくしました。

また今回の VFS で、様々なことに興味を持ちました。VFS に応募するときには、JICA についてほとんど知らなかったし、インフラに興味を持つこともありませんでした。しかし事前勉強会での発表を聞いたり、実際に現地でお話しを聞いて視察したりする中で、徐々に興味がわいてきました。これから先も、JICA はベトナムと関係を築いていくし、インフラ整備も進んでいくと思います。今回の VFS を通して、今後これらがどのように進展していくのが楽しみになりました。

私は今回の VFS が初めての海外で、パスポートを取得する段階から始めました。搭乗の際にはもちろん緊張しましたが、5 日目におなかが痛くなったときはどうしようかと焦ったときもありました。不安や緊張、ハプニングもありましたが、ベトナムでの 13 日間は毎日がとても充実したものでした。事前勉強会、その後の報告書の作成も含めて、とても自分のためになるものでした。言葉に表せないくらい、VFS に行ってよかった、そう感じます。ここで得たもの、感じたものを無駄にすることなく、今の日本での生活に生かしていきます。



フィールドリサーチのメンバー



ホームステイ先のチンさんと、頂いたご飯



ベトナムで学んだこと

人文学部 法律経済学科 1年 河嶋敬太

思い返してみると、僕がベトナムフィールドスタディに参加したのは、中学生のころに参加した名古屋大学でのアジアの文化についてのセミナーでベトナムの文化について学んだことがきっかけでした。その際に、ベトナムの美しい景観や、美味しそうな食べ物などを知り、そのころからいつかはベトナムに行ってみたくて思っていました。そして今回、ベトナムのフィールドスタディの募集を知り、改めてベトナムについて調べてみると、ベトナムという国は僕が抱いていたポジティブな側面だけでなく、ストリートチルドレンや公害など、様々な問題を抱えていることを知りました。思ってもいなかったベトナムの現状にショックを受け、その現状を自分の目で確かめてみたいと思い僕はベトナムフィールドスタディに申し込みました。

ベトナムに来て最初に驚いたのは、やはりバイクの多さです。大通りに止まることなくバイクが行きかう様子は、ベトナムという国の活気を感じさせました。さらに、ホーチミンの街は大きなビルがずらりと立ち並び、僕がベトナムや東南アジアに抱いていた貧しい国というイメージとは全く異なるものでした。

また、ストリートチルドレンの子どもたちと交流した際には、子供たちの元気で明るい姿に本当に驚きました。彼らと出会うまでは、ストリートチルドレンの子どもたちというのは少し影を持ったような雰囲気があると思っていたからです（今思うと失礼な話ですが……）。しかし、実際に子どもたちと交流してみると、その姿は日本の子どもたちと何ら変わりはなく、鬼ごっこをしたりサッカーボールで遊んだりしている彼らの姿は、本当に毎日を楽しんでいるようでした。この日の子どもたちとの交流を通じて、彼らの毎日が辛いものだ勝手にイメージしていた自分が恥ずかしくなりました。他人の気持ちを勝手に想像して、同情したりかわいそうに思ったりすることほど自分勝手なことは無いと思います。今、日本、世界にはアフリカの貧しい地域の子子どもたちや重い病気を抱えた人たちなど困難な状況と戦っている人たちがたくさんいます。そういった人たちのことをただイメージでものを語るのではなく、まずその人たちのことを知ってから、その上で何をしたらよいのかということを考えていかなければならないなと感じました。

今回の旅は、僕がベトナム、東南アジアに対して抱いていたイメージを覆すような出来事ばかりでした。それらは、僕にイメージで物事を語らないこと、そのために事前調査をしっかりとすること、そして実際に自分の目で確かめることの大切さを教えてくれました。最初は初めてのアジアの国の訪問に期待と不安の入り混じった中での出発でしたが、終わってみると予想以上に収穫の多い旅でした。何よりも、ベトナムという国が大好きになりました!!

最後に、ベトナムで出会ったすべての人々、一緒に研修を成功させたVFSのみんな、お世話になりっぱなしだった長縄先生、本当にありがとうございました!!

海外で働く

生物資源学部 生物圏生命科学科 1年 榎原莉子

VFSを通して一番実感したことは、海外で働くことは珍しいことではないということです。私は高校生のときから、青年海外協力隊に興味を持っていました。さらに、海外で働くなら協力隊しかないと考えていました。しかしベトナムで働かれています方たちのお話を聞かせていただき、協力隊のみが海外で働く道ではない、と気づきました。なぜなら、ベトナムの会社に新卒で就職したり、ベトナムで会社を興したりしている方がいらっしゃるということを知ったからです。今は企業に就職して海外に派遣されるという道もあるのではないかと思います。しかし同時に協力隊の仕事にさらに魅力を感じました。私がVFSの参加を志願した理由は、現役の青年海外協力隊の方のお話を働いている場所で聞くことが出来るからでした。農業、医療、教育、建築、コミュニティ開発、工業など想像していたよりも様々な分野の方のお話を聞くことが出来ました。若い方も多く、コミュニティ開発など専門性がなくても参加できる分野があると知り、協力隊を身近に感じる事が出来ました。どの道を選ぶにしても、「職場は海外」という思いは強くなりました。VFSではお話しくださる方と食事をご一緒させていただくことが多く、お仕事のことだけでなく日常のこと、なぜベトナムで就職したのかなど、深くお話しすることが出来ました。みなさん目標を持っていて、とてもキラキラしていて魅力的でした。海外で働くのって面白いだろうなと思いました。様々なお話の中で、英語ができるにこしたことはないが、それよりも自分の強みがある方が重要だ、ということが心に残りました。今の自分には強みがありません。専門分野になるだろう農業の知識がたくさんあるわけでもない、歌もうまくないし、これが好きといえる趣味もない。このままではダメだと痛感しました。せつかく時間だけはある大学生活なのだからもっと勉強もして、いろんなところへ出かけて、好きなことや、強みを見つけていきたいと思います。約2週間の研修は、とても楽しく、長かったようにも短かったようにも感じられる濃い日々でした。毎日シントーを飲みに出かけたり、オールして朝早くからホテルの周りを散歩したり（帰りに道に迷った）、犬肉を食べに行ったり充実していました。犬肉を食べに行ったときにお店がわからなかったのも、シクロと呼ばれる人力車の自転車バージョンのおじさんに連れて行ってもらい、さらに食べている間も待っていてくれました。なんて気前のいいおじさんだ！と気分を良くしていたら、送迎代だけでなく待った分の料金もきっちり払わされたのはいい思い出です。VFSメンバーとはベトナム出発前のぎこちなさは嘘のようになくなり今はとっても仲良しです。ステキなメンバーでとても幸せでした。VFSに参加できて本当に良かったと思っています。知識が増えただけでなく、どう生きていけばいいのかということも学びました。綺麗事かもしれませんが、お金には変えられない貴重な体験をさせていただきました。来年も多くの人に参加してほしいです。最後にベトナムでお会いした方々、長縄先生、VFSメンバーの皆さん本当にありがとうございました。

当たり前の日常に感謝！

人文学部 法律経済学科 1年 下山諒

私は今回のVFSが初海外で、出発前まではとても興奮気味でした。しかし、ベトナムに到着して、宿泊地までの道のりでベトナムの大都会の風景を見て嘖然としました。バイクにまたがる人でごった返し、道は日本と比べ物にならないほど汚く、粉塵などであまり良くない空気の臭い……。長い間日本に籠っていた私の常識がはじめて覆されたかのようでした。少しばかり気分が落ち込んでしまいました。低い電線に高身長私の頭が当たり、感電死を危惧してしまったり、流れの弱いトイレを詰まらせたり、VFSの前半はウェットティッシュが手放せないぐらいに神経質になってしまったりしました。しかし、私はこれらの経験や多くのプログラムを通して、日本に居ては絶対に気がつくことのなかった発見を多くしました。この経験が将来、必ず役に立つときが来ると確信しています。

私は幼い頃から両親や教師など、周囲の大人たちから「お前たちは恵まれている。感謝の気持ちを持って生きろ。」と言われ、ぼんやり聞き流していました。確かに、日本には安全な飲める水道水があり、衛生管理は厳しく、道路の舗装や建築はしっかりしており、料理も美味しいものばかりです。それは知っていたのですが、ただ、今回ベトナムを訪れるまでは、普通の人間の思考ならこうするだろうと、今身を置いている環境が当たり前のものだと思っていました。ですから、ベトナムに来て見たものに衝撃を受けてしまうことも多々ありました。先述したように、現地における生活面におけるトラブルやハプニングは日本では体感できないものです。しかし、私がショックを受けたことは、トラブルやハプニングに限ったことではありませんでした。

急速な経済成長が著しいベトナムでは貧富の差が大きいと言われます。確かに、大半のベトナム人がバイクを使っている中で、一握りの自動車が走る光景を見る一方、路上で店を出しながら生計を立てている人の姿も目にし、格差を実際に目撃してきました。また、訪問先の一つであるFFSCビンチュウ能力開発センターで学ぶのは、貧困層の家の子供たちで、一方で二日目に訪問したホーチミン市師範大学など、大学まで通って勉強している人たちもいるということも目にした格差の一つです。こういった現状を見るといろいろと考えさせられることがあります。しかし、私はベトナムの人々は皆前向きであるという印象を受けました。ビンチュウセンターで学ぶ子供たちは各々事情を抱えているはずなのですが、私たちに輝かしい笑顔を見せてくれました。教科書をもって嬉しそうにする姿を見ても、一生懸命勉強したいという意味が伝わってきました。また、現地で交流した大学生も、勉強に目的を持っている人が多く、本当に英語や日本語が堪能で、将来をしっかりと見据えて勉学に勤しんでいるのだなと感心しました。ベトナムに限った話ではないかもしれませんが、恵まれている人たちだけでなく、貧困層の子供たちでさえ希望を持って懸命に生きていることが分かれば、今の私の生き方、勉強に対する意識など、戒めなければなら

ないことが多くあります。現状では、ベトナムの人々に比べたら選択肢は多く、努力次第で何とかなることもあると思います。しかしながら、今の私が10年、20年と続いていけば、いつか彼らよりも深刻な状況に陥ってしまうこともあるでしょう。

ベトナムへ行き、自分にとっての一番の成果は、「日常生活に感謝すること」の意味を心から実感できたことと、まず生き方を見直さねばならないという自分に言い聞かせるべき教訓を得ることができたことです。こうした機会に巡り合えたということにも感謝しています。

余談ですが、ベトナムで食した現地の料理の話をしたと思います。ベトナムには本当に美味しい料理が溢れていました。特に、バイン・ミー、牛肉のフォー、ブンチャー、そしてシントー（フルーツシェイク）には感動しました。ベトナム料理の特徴は、香草を挟み、タレにつけて食べることが多いということです。個人的にパクチーは匂いが独特で味も合わなかったのですが、その他の香草の香りは爽やかで心地よかったですし、タレはクセになります。ヌック・ナムという魚油のタレがよく出てきたのですが、どの料理にも合いました。そして、ベトナムの料理に限らず、物価が安くお腹一杯味わえたことは最高でした。牛肉のフォーについては、日本円にして250円ほどでたくさん牛肉を食べることができて幸せでしたし、シントーは最後の三日間は毎日飲んだほど濃厚で美味しかったです。一杯約150円です。信じられません。物価といえば、市場やスーパーでの買い物も楽しかった思い出です。ぼったくりの被害にあったりもしましたが、基本的には安いので、私の場合、買い過ぎて、気づいたらVNDを切らしてしまいました。金銭感覚が鈍ります。

こんな感じで、ベトナムでは本当に楽しい思い出づくりもできましたし、外国の文化を肌で感じ刺激を受けてきたので、これからもいろんな国に行つて学びたいと思いました。そして再び、ベトナムに赴きたいと思います。

ベトナムフィールドスタディ 2014 を振り返って

国際交流センター 特任准教授 長縄 真吾

ベトナムとは出向元の JICA 勤務時代に 4 年間のハノイ駐在を含め 8 年近くの付き合いがありました。前任者の異動により、過去 7 回の歴史を誇る伝統あるベトナムフィールドスタディの企画と引率を担当させてもらえたことは、ベトナムとの不思議な縁を感じます。前任の吉井先生が築かれたプログラムも継承しつつ、南北の違いを含めた多様なベトナムの多様性を学生に見てほしいとの思いから、今年から新たに北部訪問を追加するなど、多くの日程を追加しました。慣れ親しんだベトナムの地に久しぶりに長期間滞在し、ベトナムの急速な発展と変貌ぶりにあらためて目を見張るとともに、ベトナム人学生やストリートチルドレンとの交流を通じ、これまでとは違うベトナム人の底知れないエネルギーと将来への可能性を感じました。

今回のさまざまな訪問先から多くの学びを得ましたが、一番の学びの機会となったのは、多くのベトナム人・日本人との出会い、そこからつむぎだされるライフストーリーであったと思います。食欲に将来を見据えるベトナム人学生や研修員や、協力活動に携わる JICA の現地関係者、日本人駐在員の方々との交流やディスカッションを通じ、自らの日々の生き方や人生設計を考え直すきっかけまで得られた学生が多かったことは予想外の収穫であったと思います。参加学生諸君には、ぜひこの体験を帰国後の日常に埋没させることなく、具体的な行動につなげてほしいと願います。

私にとっては、今回のフィールドスタディは、三重大生とどっぷりと同じ時間を過ごすはじめての機会でもありました。学年・所属学部・参加動機や関心事項も十人十色の参加学生諸君と、毎日同じ体験をしながら、ホテルやバスの中で全員の感想や気づきを共有する中で、日々新たな刺激と発見がありました。準備段階から本番まで試行錯誤の連続でしたが、慣れない新米教員に辛抱強くつきあってくれた学生諸君には感謝しています。特に、昨年度の参加経験もふまえて企画段階からさまざまな助言をしてくれた中野君の存在は非常に大きかったです。

また、今回のフィールドスタディは、多くの方の協力と厚意がなければ実現しませんでした。素晴らしい学生交流とホームステイの機会をつくってくださったホーチミン市師範大学日本語学科のガー先生はじめ諸先生・学生や家族の皆様、訪問プログラムのアレンジや学生の受入をしてくださった八木さん、豊田さんはじめ JICA ハノイ事務所および南部連絡所の皆様、訪問を快く受け入れてくださった日本人専門家・ボランティア・関係機関・ベトナム側カウンターパート機関の皆様、学生に惜しみなく経験を語ってくださった大塚さんをはじめ現地日系企業駐在員の皆様、快適で安全な滞在と子供たちとの交流の機会を提供してくださった FFSC 関係各位、多くの貴重な助言を下された前任の吉井美知子先生、出発前にベトナム語講座を実施してくれた三重大ベトナム人留学生のお二人、現地で特別講

義をしてくださった名古屋大学土井先生、本 VFS の実現にあたり様々な助言とサポートをいただいた江原副学長はじめ三重大学内関係各位、その他ご協力をいただいたすべての皆様に、この場をお借りして深くお礼申し上げます。

VII 卷末資料

1. 担当者一覧

	項目	担当
1. 事前準備		
【ロジ事前調整】		
	ホテル予約・支払い（HCM）	長縄・下山
	ホテル予約・支払い（プンタウ）	佐藤
	ホテル予約・支払い（ハノイ）	長縄
	レンタカー予約（HCMC）	長縄
	車手配（ハノイ）	長縄
	通訳手配（ハノイ9/24, 25）	西村・中野
【訪問先との事前調整】		
	訪問日時調整	長縄
	ピンチュウ検討	下山
	フィールドリサーチ連絡	谷口
	師範大学出し物検討	奥村・谷口
	ホームステイ連絡調整	谷口
	駐在員懇親会連絡調整	豊田・中野
	訪問先への事前連絡 （必要に応じて）	各担当
【参加者側事前準備】		
	概略日程表作成	長縄
	詳細日程表作成（日英）	野村
	メンバーリスト作成（顔写真付き）	榊原
	持ち物リスト	中野
	訪問先へのお土産	榊原
	携帯電話調達	長縄
2. フィールドスタディ期間中以降		
【滞在中（ホーチミン）】		
	中部空港出発とりまとめ	中野
	FFSC宿泊連絡・支払い	下山
	レンタカー管理・支払い	西村
	会計	佐藤
【滞在中ハノイ】		
	レンタカー管理・支払い	河嶋
	駐在員懇親会支払い	豊田
	ドンラム村ランチ清算	榊原
	会計	野村
【帰国後】		
	訪問先へのお礼メール発出	各担当
	報告書とりまとめ	豊田・奥村・榊原
	学内報告会	全員

2 フィールドリサーチについて

9月15日、16日の2日間、ホーチミン市師範大学と三重大大学の学生が合同で、フィールドリサーチを行いました。(p23～p24 参考) このページでは、グループの一覧と各グループのテーマを記載します。

グループ	名前	テーマ
1	Tai Anh Phat Thai Bich Tuyen Le Ngoc Bao Chau 中野成彦 下山諒	ベトナムから見た日本・ 日本から見たベトナム
2	Vo Ngoc Phuong Loan Phan Nguyen Anh Tuyet Nguyen Thi Thuy Nga 野村由衣 西村奈々	ベトナム人と日本人の家 族の違いについて
3	Ho Thi Tu Le Nguyen Thanh Que Nguyen Truong Nhat Vinh 豊田瑞穂 奥村香遥	ベトナムと日本の料理に ついて
4	Nguyen Hoang Xuan Nghia Le Uyen Thao Do Nguyen Thanh Van 谷口佳実 榊原莉子	ベトナムと日本の衣服に ついて
5	Le Thi Tam Trieu Vy Yen Nguyen Thu Huong 佐藤諒太 河嶋敬太	日本とベトナムの大学と 大学生について

フィールドリサーチは以下の手順で進められました。

●テーマ決め (8月)

フィールドリサーチのテーマは勉強会で決めることになりました。事前に、やりたいテーマやおもしろそうなテーマを出し合いました。5つ以上のテーマが提案されたため、話し合いによって5つにしぼり、グループを作りました。

●事前準備 (8月下旬～9月上旬)

各グループにより事前準備の内容は様々でした。ペアの人と話し合いをし、情報交換をするグループが多かったです。テーマについてインターネットで調べ、資料をコピーし、ベトナムへ持って行ったグループもあれば、発表の際に使えるような画像を集めたグループもありました。日本人に対してアンケート調査を実施したグループもありました。

●フィールドリサーチ (9月16日 PM)

ベトナムでは、ホーチミン市師範大学の学生と合同で調査を行いました。フィールドリサーチのグループは事前準備の段階で決まっていたのですが、この時に初めてテーマについて話をしました。師範大学の学生や、先生などにアンケート調査を行ったり、実際に街に出て調査を行ったりしました。師範大学の学生とは日本語で会話をしました。

●発表準備 (9月17日 AM)

事前準備やフィールドリサーチで得た情報をまとめ、考察し、発表の練習を行いました。また、発表の際に使用するスライドを作成しました。途中スライドのデータが無くなるなどハプニングに見舞われたグループもありましたが、どのグループも発表の準備を終えることができました。

●発表 (9月17日 PM)

フィールドリサーチの発表は、グループごとに前に出て発表を行う形で行われました。どのチームもスライドを使用し、データや画像を用いて発表をしました。発表後には、審査員や学生による質疑応答の時間が設けられました。発表には3人の審査員がさまざまな観点から審査を行いました。発表内容が特に優れていたグループには、賞品が贈られました。

3 ベトナムフィールドスタディ参加者募集案内

2014年6月
国際交流センター

下記のとおりベトナムフィールドスタディの参加者を募集します。

1. 目的

- ・途上国の開発現場・国際協力のプロジェクト視察、ベトナム人学生との交流等を通じて、グローバルな視野と問題発見・解決能力を身につける
- ・将来の国際ボランティア活動のきっかけを得る
- ・途上国で行動する力を養う

2. スケジュール

- 9月14日（日）中部国際空港 → ホーチミン
21日（日） ホーチミン市→ハノイ
25日（木）ハノイ市発 中部国際空港着

3. プログラム

- ・ホーチミン市師範大学学生とのフィールドリサーチ・発表
- ・JICA ベトナム事務所・南部連絡所訪問
- ・ODA・NGOプロジェクト現場見学、青年海外協力隊員活動現場訪問
- ・民間企業日本人駐在員との懇談会
- ・国際学会への体験出席
- ・大学関係者宅でのホームステイ

4. 参加資格

正規学生、院生。費用の自己負担が可能であること、健康であること、日本国籍を持つこと

5. 定員

9名 希望者多数の場合は応募順、志望動機、成績等を基に選抜

6. 申し込み方法・締め切り

2014年6月25日（水）

国際交流センター長縄（naganawa@cie.mie-u.ac.jp）宛にメールで
氏名、所属、学籍番号を連絡

7. 自己負担費用

- ・航空券代（7万円～10万円）
- ・自宅から国内空港往復交通費
- ・海外旅行保険代（約10,000円）
- ・ホーチミン市での宿泊費（1室約20米ドル）
- ・食費（1食200円～）

- ・ 個人的な土産代、飲み物代、自由時間の交通費等
- ・ ホーチミン師範大生と同行する場合のタクシー代、全員の入場料、全員の外食代
- ・ パスポート取得費用

8. 奨学金

文科省よりひとり 7 万円の奨学金が支給される予定
 (ただし成績等の条件により支給されない場合あり)

9. 参加者の義務

- ・ オリエンテーション・事前学習会への出席、口頭発表
- ・ 帰国後のレポート作成 (複数)、報告会 (複数回) での口頭発表
- ・ 来年度のフィールドスタディ参加者への指導、助言

10. 留意点

- ・ 引率は教員 1 名
- ・ 参加者事前学習の観点から、可能な限り国際交流センター前期集中講義「地域開発論 (9 月 2~3 日) を受講すること
- ・ 訪問先では日本語、英語を使用

11. 照会先

国際交流センター 特任准教授 長縄 真吾

